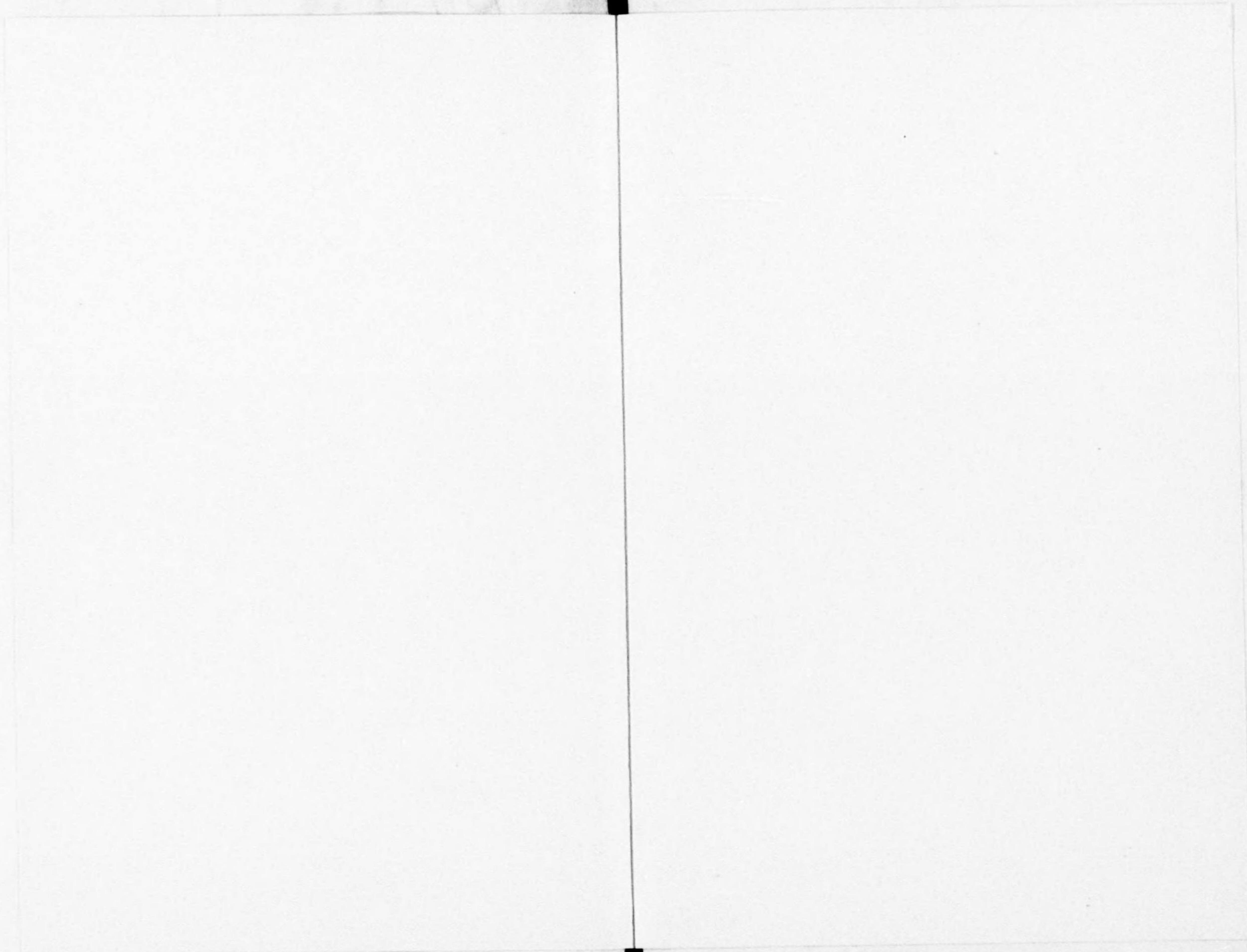


始

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4

380
2
/





工 6Q-14

柳田國男先生著作集 第八冊

退
讀
書
歷

實業之日本社

14327

2380
1



題
簽
折
口



143957

自序

批評家としては、此本の著者などはまあ無能の方であらう。いつでも紹介するのは讀まれさうも無いものばかり、結果から見れば書物を賣れなくする爲に序文を書いた様な形にもなつて居る。誰の参考になり相談相手になつたといふ心當りは一向に無いのである。しかし、本屋は或は聴くことを欲しないかも知らぬが、本は元來手分けをして讀むべきものである。殊にこの節の如く出るものが多くなつては、人の讀む本ばかりを追掛けて居たら、片隅に讀まれぬ本が残つて仕方が無い。此意味に於ては私のやうに、退いてやゝ普通で無い一つの持場を、擔任する者のあることも必要であつた。乃ち新時代の文運の總清算の爲に、斯ういふ讀書の記録を遺して置くことが、必ずしも徒勞で無いと思はれ

自序

a 380 /



題簽
折
口



143957

自序

批評家としては、此本の著者などはまあ無能の方であらう。いつでも紹介するのは讀まれさうも無いものばかり、結果から見れば書物を賣れなくする爲に序文を書いた様な形にもなつて居る。誰の参考になり相談相手になつたといふ心當りは一向に無いのである。しかし、本屋は或は聴くことを欲しないかも知らぬが、本は元來手分けをして讀むべきものである。殊にこの節の如く出るものが多くなつては、人の讀む本ばかりを追掛けて居たら、片隅に讀まれぬ本が残つて仕方が無い。此意味に於ては私のやうに、退いてやゝ普通で無い一つの持場を、擔任する者のあることも必要であつた。乃ち新時代の文運の總清算の爲に、斯ういふ讀書の記録を遺して置くことが、必ずしも徒勞で無いと思はれ

自序

る所以である。

後世百年の珍書奇籍は、事によると今私たちの歎賞し愛撫し、時としては切に其作者と共に、知遇の當代に得難いことを、悲しんで居るものゝ中から出て行くのかも知れない。現在の多くの蒐集家が、人や偶然の力で珍奇になつたものを、聞き見つけることにはかり苦勞して居るに反して、私は少なくとも其原因に参加して居た。書物が賣れまいといふたつた一つの理由の爲に、日の光を見ないのは國の耻だと思つた。目前読み解く者が無いといふだけの根據を以て人間の創意を没却するのは不法だと私は考へた。二十年前の『甲寅叢書』、それに續いて出た五十卷の『爐邊叢書』などは共に此見解を世に問はうとした我々の運動であつて、方法は如何にも拙だつたらしいが、趣旨だけは既に宣明せられて居る。『諸國叢書』の計畫も今は頓挫して居るけれども、曾ては亦私の書齋

の一事業であつた。全國の邊土に生死した無名の篤學の、最も世に知られない著述を複寫して、集めて供養をしようといふのが、此叢書の立願であつたが、歲月を経る間に徐々としてそれが有名になり、斯うして残して置く必要がもはや無くなつて、悦び且つがっかりした場合も幾度かある。書物を有りふれたものとする機關は、今日は全く備はつて居る。獨り大都の大量生産者が、過剰の圓本を市に曝したのみならず、個々の蒐集者も亦競うて其所得を披露し、しかも丁寧に其内容を説き立てて、讀まずとも大抵用が足るやうに骨折つて居る。もしも此間に於て新らたに事を好み、強ひて今まで省みられざりしものを省み存在し難きものを存在せしめんとする企てが無かつたならば、行く／＼珍奇の種は或は此世から消えてしまつたかも知れない。少なくとも自分だけはさういふ風に考へて、わざと時流に背いて片脇の小路ばかりをあるいて居たのであ

る。

今となつてしみじみと感ずることは、書物は一生かゝつても、案外に僅かしか読めぬものだといふことである。私は一族兄弟の間で、誰よりも多くの暇を持ち、又幼少の時から本は好きであつた。それで居てなほ世人の爲に談り得る所は、寄せ集めてたゞ是ばかりしか無いのである。將來の讀書子が歩み及ぶ文の林は、嘗て私たちの跋涉したものよりも、遙かに廣漠たる樹海でなければならぬ。そこに一條の正しい道を切りあげようとするには、迷うて戻つて來た柴人の言も柴である。素より群衆のどや／＼と行く大通りは別にあるが、私はなほ佇立して鳥語幽かなる、羊腸の徑を指さうとして居るのである。

(昭和八年六月晦)

目次

自序	一	
批評集	一	
アイヌ研究	——金田一京助著	一
和尚と小僧	——中田千畝著	五
加無波良夜譚	——文野白駒著	八
動物界靈異誌	——岡田蒼溟著	一三
日本巫女史	——中山太郎著	一八
山窩の生活	——鷹野彌三郎著	二三
東側の窓	——ミズEキース著	三七
目次	一	

千葉縣郷土誌——矢部鴨北著……………三
 達磨と其諸相——木戸忠太郎著……………六
 註優名類聚抄——野口恒重複刻……………四

序 跋 集……………

佐喜眞興英著 『女人政治考』……………四
 高木敏雄著 『日本神話傳説の研究』……………五
 土橋里木著 『甲斐昔話集』……………六
 佐々木喜善著 『聽耳草紙』……………六
 高田十郎編 『大和の傳説』……………七
 青木純二著 『山の傳説』……………七
 佐々木喜善著 『奥州の座敷ワラシ』……………八
 早川孝太郎編 『能美郡民謡集』……………八

三上永人編 『東石見田唄集』……………一〇
 澤田四郎作編 『ふるさと』……………一〇
 伊能嘉矩著 『遠野方言誌』……………一四
 荒垣秀雄著 『北飛騨の方言』……………一六
 大田榮太郎編 『滋賀縣方言集』……………一九
 桂 又三郎著 『岡山動植物方言圖譜』……………二四
 早川孝太郎著 『花祭』……………二六
 宮良當壯編 『沖繩の人形芝居』……………二八
 白野夏雲作 『十島圖譜』……………三三
 伊能嘉矩著 『臺灣文化志』……………三五
 江川俊治著 『ハルマヘイラ島生活』……………三六
 鈴木覺馬編 『嶽南史』……………三六

鈴木鼓村著 『耳の趣味』……………一七〇

自編 『郷土會記錄』……………一八二

讀書雜誌記……………一八七

偶讀書抄……………一八七

『耳袋』とその著者……………一八九

百年前の散歩紀行……………一九四

一青年の旅行記……………一九九

霜夜談……………二〇三

我が燈火……………二〇三

菅江眞澄……………二〇四

鶴啼く秋……………二〇七

雪の野のまぼろし……………二〇九

讀書懺悔……………二二二

讀書術雜談……………二三三

新傾向……………二三三

讀物の地方色……………二三七

愛書家の立場から……………二四二

半暴露文學……………二四三

婦人雜誌のこと……………二五〇

熙譚書屋閒話……………二五九

雜記……………二六七

『日本志篇』に題す……………二七〇

古書保存と郷土……………二七三

郷土叢書の話……………二八二

索引

六

批評集

『アイヌ研究』

——金田一京助著——

金田一君は最初専ら言語の研究の爲に、アイヌたちの部落に近づかうとした窮屈な旅行者であつたが、素直にして虚言を云ふことの出来ぬ彼等から、活きた言葉の意味を聴いて居るうちに、いつの間にかアイヌの感じを感じ得る人になつて居た。澤山の友人が殊に日高と東樺太の荒濱とに出来た。旅行に出られない季節には、種々のアイヌが入りかはり立ちかはり、金田一氏の東京の書齋へ、御客になつてやつて来て、何時でもまだ居ますかと

アイヌ研究

一

驚くほど、永逗留をして行つた。彼等の多くは蝦夷の名門舊家の出で、もちろん皆同情すべき保守黨であつた。今の生活の味氣無さを、美しい歌と物語の記憶に由つて紛らさうとする人々であつた。故郷へ還つて程無く死んだと云ふ者も、若き老いたる何人かゞ有つたのである。それが至つて自然なる度々の會話の序に、時としては又思ひ遣りの深い好奇心に導かれて、かうして篤學なる學徒の手に、空しく亡びてはならぬ若干の前代文化を、記録せしむる結果と成つたのは、學問の方から言つても誠に無上の機會であつて、また此書物が『アイヌ語の研究』に先だつて、世に現れた事情の一つでもあつた。

アイヌ種族の最も大なる朋友、パチェラー老師の五十年の辛勞に對しては、我々の感激はまだ十分とは云はれないが、幸ひにして其功績は、英語を讀み得る國々の學者からも、また彼の教への神様からも認められて居る。しかもなほ金田一君のやうに、必ずしも酬いられんことを期せざる研究者によつて、考へて置いてもらはねばならぬ問題は残つて居た。太平洋上の何れの島においても、同じ經驗は既に幾度かくり返されて居る、どんな慈

愛に充ちたる傳道者の眼光を以てするも、なほ入りとほることのならぬ心の隈を、所謂土人は澤山に有つて居るのである。無始の大昔からの幸不幸の標準、生死に對する考へ方などの、丸々西の人と違つて居た結果が是であつて、憚るとか隠すとか云ふ故意は無くとも、自分でもどう思つて居るのかゞ、實ははつきりとは判らぬのである。パチェラーさんの道が益と行はれると、此方は次第に幽かになつて行き、移り變りの時代にはそれがたゞ地下の泉の如く、靜かな心細さになつて流れて居る。金田一君は後の民族心理を學ぶ人の爲に、來つて之を掬まうとしたのであつた。

アイヌは見た所至つて寡黙な民族であるが、不思議に豊富なる語言を有し、それがまた時代と外界に動かされて従順に變化した。文字の無い人たちが程氣の毒なものはない。隣を接した我々の切れぐの記録の他には、あれだけさきさかえた當年の榮華が、僅かに老翁老女の傳承の中に遺留して、年と共に消え去らうとして居るので、其上に彼等にはまた大に忘れ、大に新らしくなるべき必要が迫つて居た。何か話は無いかと云ふ類の、同情の乏

しい問ひやうでは、面食ら者^らは決して彼等のみでは無い。我々の故郷の長老たちなども、之によつて次第に若い時代に迎合するやうになつた。さうして歴史の書物までが、強い時代の香を帯びるやうになつてしまつたのである。金田一君が單にアイヌの古語を知る爲に、忘れ残りのオйнаユカラを採集し、其辭句の意味を尋ねてゐるうちに、偶然に彼等の生活の全體にしみ通つてゐる昔の信仰を見付けたのであつたとしても、久しく其隣に住んでゐた我々の先祖の心持が、之を有力なる参考にして、段々解つて行くのは其お蔭である。いはんやこの人間愛から發足した辛抱強い研究の態度は、疑ひも無く著者の性情に基づくものであつたとすれば、しばらく日本と云ふ國に缺けてゐたヒュウマニストの學問の再興の兆として、殊に我々をして悦び望ましむる所が多いのである。

此書物の特色はなほ幾つかある。中代以降の文獻の整理判別にも周到なる力が用ゐてある。之によつて利益する者は獨り未來のアイヌ語研究者のみで無い。例へば近頃の成吉思汗義經説の如きも、もう早くから無用の勞であつたことが、此書において明かに示されて

居る。十七年來の論文集とはあるけれども、生活誌から文學へ、詩歌から神話へと説明が順序をおひ、其傳承によつて本來の宗教生活を明かにしようとする點まで、首尾聯絡があつて其間に重複と矛盾を見ぬやうに注意して書き改めてあるのは、我々に對しても又親切な用意であつた。

〔東京朝日新聞〕大正十四年三月十六日

『和尙と小僧』

——中田千畝著——

昔々ある山寺に、和尙さんとお小僧とが住んでをりました。

かういふ文句を以て始まるべき民間の話が、古今に渡つて百數十章集めてあり、それが

まだ日本國內の調査の、ほんの片端に過ぎないといつて居る。

私がこの本を一讀して、驚きかつ歎じた點が七つばかりある。この欄の行數の許す限り、その印象を書いて見ようと思ふ。

第一にはよくもまあこの種の珍らしい題目に注意を拂ひ始めてから、何年間もこつこつと黙つて搜索が続けて居られたといふことである。私ならとつこの昔に騒いでしまつて、もうまた青くしてしなびたものにして居たかも知れぬ。しかるにこの本の如きは正しくよく熟して落ちた果實である。

第二には書店といふからには損失を祈願する氣遣ひはないのだ、が篤志にもせよ敢然としてこれを世に問ふに至つたのは、明かに時代の力である。『和尚と小僧』すら本になつた。吾徒はもう安心してよろしい。これが愉快なる今回の新発見の一つであつた。

第三には我々の生がいの最も個人的な部分、即ち祖母に抱かれて一隅に寝た時代の夢まぼろしが、これほどまでに萬民公共の重大事件であつたとは、全く話し合つて見なければ

分らぬことであつた。中田君無かりせば我々の童幼ばかりが、獨り僅かに保存し得た大切な昔が、無益の物恥ぢの爲に永く埋没してしまつたかも知れぬ。時世は誠に一個の山寺の和尚である。明敏なる小僧によつて看破——啓發せらるべき事柄は、これから後もなほ多であるに相違ない。

第四に我々の殊に感動を新たにするのは、この民族の千古を一貫した、笑ひの繼承とも名づくべきものである。例へば三百年前に安樂寺の策傳大徳が、ある和尚の弱點や、小僧の機智として書き残した話は、これを現代語に譯して話して聽かせれば、昭和の少年もやはり高笑ひをする。しかもその様式たるや、たゞ少しの變更を以て、更に悠遠の大過去から引續いて無邪氣で元氣に充ちた少年の耳を楽しませしめ來つたものである。

話の根本が本當の昔々であつて、決して中古の文藝の所産でなかつたことは、單に何物を以て滑稽の犠牲として居たかを、考察して見ても明らかである。人には衰老がありまた次々の代謝がある。曾て優越の地位を獲得した大和尚でも、忽ちにして、黄金の小

杖を携へて鬨ひを挑みに来る者を迎へねばならぬ。師弟長幼の倫理法則は、もちろん大に彼を援護したらうが、しかも單純なる客觀者の眼には、それを飛花落葉の自然の推移と同じく、楽しく快く眺めて居ることの出來た時代もあつたのである。舌切花咲の童話で、愚者が簡單に滅び、二人棕助の物語で智ある者が無條件に勝つた如く「然れど氣の毒だ」といふ言葉をまだ知らなかつた時代から、和尚は小僧と戦ひつゝ笑はれつゝ、我々の兒童に取圍まれて、中田千畝氏が本を書く時代を待つて居たのである。

〔報知新聞〕昭和二年五月十二日

『加無波良夜譚』

——文野白駒著——

越後は民間話のきつと多かりさうな土地だが、今までは採集がまだ一向進んで居ない私の知る限りでは、石原亨氏の『越佐傳説夢を買ふ話』、中野城水氏の『傳説の越後と佐渡』が、共に若干の昔話をその中に混入して居るが、その分界も明かならず、又幾分か修飾せられて、原形を認め難い憾みがある。外山曆郎君の『越後三條南郷談』に七つ八つ、石井研堂氏の『國民童話』に「旅と傳説」の昔話號に出た十ほどのものが、「昔々ある所に」の形をほゞ保存して居るが、こればかりでは如何にも物足りない。と思つて居る際にちようどこの集が出た。どうかもう少し流行してくれよばよいと思ふ。

『加無波良夜譚』などと妙に氣取つた名をつけて、まづ少し損をして居る。これは率直な南蒲原郡昔話集と題すべき本であつた。この郡葛巻村に八十三年ほど住んで居る一老女、親子代々昔話が好きであつたといふ傳承者の、思ひ出を直接に書き取つた一冊子で、卷頭にはそのお婆さんの寫眞が載せてある。

紹介はこれでもう十分かも知れぬが、私には自分の實驗に基づいて、もう二つ三つ書添

へて置きたい所感がある。その一つは速記術がこの採集には利用せられたといふ事、これは多分始めての試みと思ふが、その利益はたゞ精確といふことだけでなかつた。速記だから文句をかへることが出来ず、又文章を書く必要の無かつた上になほ土地の言葉が多く現れて、如何にも越後の老女らしい心持が出て居る。その方言にはそれ〴〵解釋がついて居るから、方言集としてもたゞの單語篇よりは面白い。さうしてその解釋が可なり適切で、一見したところ土地の人の手になつた様な感がある。これもまた速記の賜であつた。

第二の所感は南蒲原の昔話が、どうやらもう收穫期をおくられて居るらしい事である。一百二つの昔話の中には、「歌をうたふ龜」や「婆皮」や「鶯の法華經」のやうに、他ではこわれたものが此地ではやゝ原形を存して居る例もあるが、一方には磨滅省略の度のやゝ強いものも多い。其上にたゞの破片となつて記憶せられて居るのが、惜しいかな他にまだ數十も有つた。それでも痕跡が有れば分布だけは、なくとも認められるので、この集では丹念にそれを列挙して居る。これが將來全國的結集の行はるゝ場合には、やはり有力なる一つの

参考になるので、この點でも本書は忠實細心のよい手本と評し得られる。

第三には採集の方法も私には賛成が出来る。場所はその老女の娘の家で、時は大抵夜分、周囲には話好きの中年の男女が數人居て、程よく相づちを打つて面白がつて聴き、折々は私の方では斯うなつて居る」などと、同じ郡内でも村により家によつて、傳への變つて居ることを語つて、細かな點の異同を注意したさうである。これが多くの採集者には望み難いことで、時には却て身内の者などが笑止がつて、思ふ存分にしやべらせぬこともあり、年をとり髭などのある自分たちは、まづ昔話だけは斷念して居たものであつた。今後は計畫的にこの方法を眞似てもよいと思ふ。

第四に昔話には方式が重要であつたこと、普通の老女などには、たゞ内容だけをかいつまんで、傳説などのやうに話して聴かせることの出来なかつた事、これも今度の採集でいよいよ明かになつた。越後では昔話の發端は「むかし有つたてんがのし」等で始まり、終りは普通「いちやぼーんとさげた」などゝなつて居る。中間の區切りには聴く者が「はーい」と

いたり、以前は又「さーんすけ」といつたりしたさうである。さういふ要件が伴なはぬと、話す者も昔話の気分になれない。それで雑談が説話に遷る場合などに、「昔あつたでんが」で話させてもらひます」とことわつて、たび／＼話し方を改めたといふことである。他の府縣においても説話の採集者だけは、前以てこの形を學んで、こちらもそれで誘ひだす様にすべきだと思ふ。

『加無波良夜譚』の採集者文野白駒は多分越後出身の人で、常は東京にでも出て居る人だらうと私は思つて居た。ところが後になつて聞いて驚いたのは、これが私の古くからの知人、鹿兒島縣喜界島の岩倉市郎といふ青年であつた。喜界は素より昔話に満ちたる島で、岩倉はその優秀なる一傳承者ではあるが、それが五百里も北に隔たつた越後の雪國に来て、僅か二月餘の滞在の期間に、この周到なる記録を世に遺すことになつたのは、單に同人の篤志と熱情、乃至は南蒲原人の隔意なき態度のみが、能く然らしむることを得なかつたらう。これには昭和文化の我々に許す技術と言語交通、此種の採集を意義づけた學問等、あ

らゆる好條件が來り参加しなければならなかつたと思ふ。さうすると本書は決してわが岩倉君一人の記念物ではなかつたので、これを五百部の限定版などにしたことは間違つて居る。

(「東京朝日新聞」昭和七年三月十八日)

『動物界靈異誌』

——岡田蒼溟著——

この書の著者岡田蒼溟氏は、いつでも故井上圓了氏と論判をする様な態度で物を書いて居る。井上博士がもし自然科学に對する章魚配當の要求者ならば、岡田さんは則ちその第一回の預金取付人である。しかも我々の知識の未拂込株式が、如何に大切なる債權である

かを、省みなかつた點は御兩人共通である。

西洋でも神靈學會の人々には、最初から理學の力を見放して居る者が多い。さうして居ながら可なり敏感に、いはゆる唯物論者の批判を氣にかけて居るのである。そんな風だから餘計に論證があり主張がある。しかし自分等の知る限り、今だけの人間の知識であらゆる世の中の不思議が説明し得られると、公言した學者は一人も無く、單に素人の中にさう過信する者が時々あるだけである。そんな連中は最初から構ひ付けぬ方がよかつたのである。

ところが日本はほとんど意地悪くと形容してもよいほどに、無数の新たな不可解現象がその素人たちの周圍に發生する。滅多にそんな事件に遭遇せぬ歐米人に比べると、どうしてもその觀測が粗末であり、取扱ひが冷淡であつた。眞摯なる岡田氏はこの態度を公憤して居るうちに、自身いち早く靈魂信者となつた。さうして甚だ愚劣にしてまた手剛い假設敵と、際限も無く闘つて居るのである。

昨年周防の天行居から、幽冥界研究資料の第二卷として刊行した『靈性談淵』は文字通り、

の驚くべき書であつて、私は泉鏡花君等と共に頻りにこれを愛讀した。今一つ『動物界靈異誌』といふすばらしい奇書がある。ガマに蛇、きつねにたぬき、それから河童および外道といふ半分は動物、半分は怪物といつてよいものゝ事業習性の實例、各數十篇づつを集めたものだといふ話を聽いて、我々はその出版を慶賀し期待し、かつ同時にかういふ忠言をした。

けしからぬ者は通例事實をよく知らぬの中に多い。前から先生の論法を豫期して、さうだと直ぐいふ者にはこれ程の證據は無用である。同派引導と異派退治とを、一つの本で片づけるのは混亂に陥り易い、まづ事實をもつて未信者を動かし、説明は尋ねてくるまでお待ちなされるやうにといつたところが、餘程その意見を容れて、今度は「これでもか」といふやうな證據だけをまづ例示して、心靈理學はほんの少しばかり、片端の方に説いてある。さうして我々凡俗の徒に取つては、岡田氏が固くかう信するといふことも、やはり確乎なる現在の事實の一である。

事實はもちろん常に非常に貴いが、その中には力の階段といふやうなものが存在する。たつた一人でも虚言だらうといひ得る材料は、決して採用せられてはをらぬが、その残りの中でも岡田さんが自身で見たもの、見た人から直接聞いたもの、見たといふ話の傳はつて居るだけのものがある。記録にある分は記録者の境遇次第で、念が入つたり粗忽であつたりする。こんな色々の實例は、五つ合せても必ずしも五にはならない。

西洋では不思議話を法廷と同じ様に、二人以上が見たといへば信すべしとするが、日本の靈異は今もつて共同の視察を通例として居る。たぬきの馬鹿ばやしの類は多人數で聴く時に、始めて奇怪として存在するのである。従つて多勢でもやはり幻覺であり得る。次には人の話といふものも存外に變つてゆくものだ。三人も人を通るともう元のまゝで無いものと、推定した方が寧ろ安全である。

といふ實例の一つとして、私ならば擧げ得る話がある。靈異誌の一八七頁にねこが物をいふたと稱する「柳田國男氏の話」が出て居る。

氏の母堂が若い時に、信州飯田の某方のかひねこが「ゴマメくれ」といつたといふ。

これは確に私が自分の書齋で、今から一年餘り前にした話の變化であるが、心あつての改造で無い證據には、私自身の話の方が今少しく面白い。それを今一應比較のためにくり返すと、話者は私の祖母であつて、それも又聞きらしいから年代が大分古くなる。土地は飯田の町の事らしいが、あるひは近在の百姓家かも知らぬ。

春のいゝ天氣の日に、おもてをゴマメ賣りがゴマメ／＼と呼びながら通つた。そのあとで障子の外に、だれだか小さな聲でゴマメ、ゴマメといふ者がある。をかしいと思つて開けて見ると、一人も人の影は無くて、縁側に家のねこが居るだけであつた。いつもゴマメ賣りが來て買ふときには、一尾か二尾くれることになつて居るので、欲しさの餘りこんな聲をだしたのかと評判した。

話には根がある以上、寧ろ成長して花がさく方が自然である。但しその事實の觀察の機會は存外に少ないのだ。岡田氏の著述は澤山の争ふべからざる事實を含み、行く行くこれ

を支配する法則が、この中から發見せられる希望を我々に與へる。それを著書自身だけが理學に對する果し狀の如く考へて居ることは、これもまた事實であるが、悲しむべき事實である。

(東京朝日新聞「昭和二年五月十三日」)

『日本巫女史』

——中山太郎著——

女と歴史、個々の國民の進運に寄與した婦人の役目、美色と愛情以外の男性統御、要するに單なる「女ながら」ではなく、女でなくては出來なかつた大きな精神事業が、不思議に今までは同性の人達にさへ省みられてゐなかつた。今までは普通に隠れたる母の力、妹の

力として、たゞ幽かなる暗示を投げられるまであつたが、實際は格別隠れても何もゐないのであつた。近代は無論新しい轉回を遂げんとしてゐるが、その以前とてもやゝ異なる曲折を経たといふのみで、何等かの形を以てこの大きな力が、行はれてゐなかつた社會はないといつてもよい。東洋では久しい間、宗教が彼等の舞臺であつた。イシス・アフロデイテ乃至は西王母の中間に、まだ我々の説き盡さざる無数の女神があつた。それを末世と繋ぎ附けようとする試みにも、常にまた女人が有力な中心であつた。その實例はあるひは偶然かも知れぬが、日本においても驚くほど顯著であり、且つ島國獨特の發達の跡を留めてゐる。中山氏の『日本巫女史』は、新たにこの問題を顧念せしめんとするの一著である。

日本の社會を現在の實狀まで持つて來るために、固有の信仰と優雅なるその管理者の意思感情が、どの分量にまで參加してゐるか。それが後にどういふ風に推移り、または抑制せられようとしてゐたか。一言でいふならば日本の女性の能力は主として今までは何れの方面に向けられてゐたか。これを事實に由つて説明したのが、この書物の最少限度の價値

である。

日本最近の二つの宗教運動、二つの民間信仰團の根柢に、たゞの二人の老女の異常心理が働いてゐたことは誰でも知つてゐる。それが突發とはいひながらも、やはり日本の村の婆であつた故に、かういふ現象も起つたのだといふまでは、認めない人は無いのであるが、さて然らばその徑路はと考へて見ると、これに答へるだけの材料は中山君しか持合せてゐない。我々の巫女は後には職業となり、また幾分か別扱ひの人間になつてゐたけれども、以前は大小の群の中から、自然に自ら指定して現はれ出づべきものであつた。尋常の家婦家娘が、因縁あつて靈を宿し、その不思議の言語をもつて男たちの行動を導き、もしくは迷ひを去り希望を抱かしめることは、近代少しづつ稀になつて來たといふのみで、決して絶對の意外では無いのである。歴史は唯物派の手に移つてから、忌みてこれを記述せず、驚く者必ずしも傳ふるの力ある者で無かつた故に、彼等の活動は次第に小さなまじなひ、うらなひに落ちぶれてしまつたが、最初は一國の政治文學まで、共に皆その影響を免れ得

なかつたのである。

佐喜眞興英君の『女人政治考』は、はじめて琉球の歴史について、この問題を考究しようとしたものであつたが、當時中山君のやうに潤澤なる史料を抱持する友人が無かつたために、その著はたゞ外國學者の假定説に一つの傍證を附加した位にしか受取られなかつた。學問にもたしかに機會があり、今がちようどその機會である様にも思はれる。

中山氏の前著『賣笑三千年史』は、巫女史と同一の意圖の下に著はされた姉妹篇ともいふべきものだが、不幸にして在來の遊蕩文學の聯想があるために、讀まれた割合には婦人問題の研究者からは、疎遠なる待遇を受けてゐた。今度の巫女史の方は交渉がずつと廣い。獨り女の力といふことを知りたいと思ふ者のみでなく、日本の神道の元の姿、少なくとも官府の眼を離れた村々の信仰が、起りまた衰へた原因を考へてゐる人にも、興味豊かなる讀物になると思ふ。

もし缺點をいふならば讀んで餘りに面白いこと、もしくは史料が雜駁に過ぎて、強ひて

價值不同の事實を繼合せて、急いで堂々たる體系を備へようとした點であらうが、これはむしろ後にこの書を利用する人々に、更により簡潔なる名著を作らしむべく、大いなる張合ひをもたせるに足るものである。社會は單に珍奇なる民俗資料の索引としてだけでも、大いにこの書を歓迎する理由があると思ふ。

〔大阪朝日新聞〕昭和五年五月二十七日

『山窩の生活』

——鷹野彌三郎著——

サンカは確かに今の警察官吏の目の敵である。此方面の人々の手帳には、憎らしいサンカ、警戒すべきサンカの現在の生活ばかりが書込まれてあつて、我々との間の久しい交渉、

詩趣に富んだ彼等の過去などは、顧みられて居らぬことは事實である。しかも鷹野彌三郎君は新聞記者として、特殊の立脚地から、この漂泊民族を觀察して居た人である。一言で謂へばサンカの友であらうと、我々は信じて居た。故に今度の本を見ると、好奇心は満足せられたが、失望は新たに生じた。折角此様な興味の深い社會問題を提供した人としては、何か用意の足らぬ所があつたやうに思はれる。

主たる抗議としては、材料蒐集の一方に偏して居たことである。此小冊子の附録に載せられたやうな普通の地方住民の報道を、今少し熱心に集められたら、著者の斷案は必ず變化したらうと思ふと惜しい感じがする。サンカは幸か不幸か本を買つて讀むことが少ないから、鷹野氏が何と言つたかを知るまいが、もし彼等は盜賊詐僞で生活する人民の群だと云ふ定義を下されたことを聞いたら、きつと非常に怨むことであらう。そんな窮屈な職業で何百年も生活の出来る筈が無い。近頃彼等の中に悪性犯罪の増加して行くことは事實かも知れぬが、それには必ず社會的原因がある筈である。之を見現さなければ『サンカの生活』

では無い。

又サンカに賈物多しと説いてあるが、是は範圍のきめ方があまり狭い故に、殊にさう言はねばならなくなるのである。此漂泊民は今まで寧ろ人に接するのを商賣として居つた。さうすれば血液の混同、もしくは部外の民の新加入を免れる道理が無い。古來純血なサンカなどは自分には一寸想像がしにくい位である。従つて無籍者だけに限るとは勿論謂はれないのである。同じやうな漂泊を爲し、同じやうな假天幕に住み、且つ互にサンカの交際をして居る以上は、之を區分することは出来ぬ。さうして一代目のサンカが、舊サンカと一所に漂浪し、又は土着して居た例も自分は二三知つて居る。

全國に散亂するサンカの數が、七八百人ぐらゐだらうとあるのには喫驚した。誤植でもあるのではないか。こんな僅かなものならば、何も社會問題と迄謂ふには及ばぬのだが、實際は悪いことをして警察から睨まれるべき者でも、そんな小さなものでは無い様だ。此頃は警察が新らしくなり、又サンカの變化が複雑になつて、所謂件數は減じたかも知らぬが、

十年廿年前に巡查の手で追はれてゐたサンカは、一縣の境だけでも年に千を以て算へてゐたと聞いて居る。死に絶えない以上は今もどこかに居るので、自分などの感じでは、大阪の周圍、或は名古屋附近でも、各々萬に近いものが動いて居ることゝ想像して居る。水掛論になるか知らぬが餘り開きがあるから一言申して置く。

サンカの族には珍奇なる話が多く附纏つて居る。殊に我々の造つた道路を忌避し、彼等だけの眼に見えぬ天下の大道があるのは面白いと思ふ。夫婦親子の慣習などにも、まだ我々と異なつた所が多いやうだが、今の内に同情の耳を以て、何とかも少し彼等の話を聴取つて置きたいものと思ふ。其點に關しては互ひに敵意ある者の接觸の記録は、眞に價値が少い。

鷹野君の著述には又文獻上の研究が足りない。假に種々の舊書に散見して居る斷片的記事を漁ることは六つかしくとも、もし之を大體に綜合比較して或斷定を下した自分の論文を見られたなら、少なくとも其説の誤りを正した後でなければ、サンカは犯罪團體なりな

ど、云ふ大膽な断案は下されなかつたらう。自分の論文は鷹野君の研究が始まつた後に、「人類學雜誌」に四五箇月も續いて出たもので、多くの人の目に觸れて居る。

序に一言するが、サンカとは別種の漂泊民で木地屋といふ者のあることは書いてあるが、彼等の共通の苗字は棕木くろまといふとあるは小棕せうそうの誤りである。さうして著者の所謂贗サンカの中に、小棕某と云ふ名の者があつたとある記事は、私としては大變に興味を惹いた。勿論別種ながら、此二種族の間に何かの交渉が有るものと考えせられたからである。大體に於て斯ういふ切れぐの報告には有益な資料が多い。それが新奇なる問題を學界に提出せられた功勞と共に、著者に向つて感謝すべき點である。

〔東京朝日新聞〕大正十三年十一月十日

『東側の窓』

Eastern Windows; by Miss E. Keith,
(Hutchinson London)

キースさんとお友だちであつた子供は、この東京にも澤山居る。私の宅などでも、始終子供はキースさんの話をして居た。その友人等が段々大きくなつて行く間、始終キースさんは極東の大陸と、諸島とを往つたり來つたりして居たので、『東側の窓』はその一人旅のスケッチである。東京、京都、鎌倉の假住居から、あるひは北海道の平取から、また京城、北平や楊子江岸の諸都市、南支那の大きな港、さてはモロ・フィリピンに住む南の島々から、今は英國の田舎に還つて居る姉さんとその夫のロバートソンスコットへ、絶えず送つて居た手紙を整理したものである。これにあの頃から既に評判になつて居た自製の日本式

版畫十枚と、二つの水彩人物畫がいられてゐる。その一つはアイヌの老翁の座像、今一つは年取つた僧の法衣を纏うて居る所、二つとも前に一度見せてもらつて、よく覚えて居る畫であつた。

朝鮮半島には殊に何回も長く遊んで居て、深い感動を受けたらしいことは、日記風の僅かな記事からでも察することが出来る。政治の方面には女らしくわざと觸れまいとしてゐるが、あの古風な沈んだ美しい單色の調和から、靜かに酌上げようとして居る過去文化の哀愁のうちには、大きな論文でも述べ切れないやうな、込入つた問題の片端がうかゞはれるやうに感じられる。然し讀者の空想を釣り込むのは、何といつてもまだ知られて居ない熱帯の島々の生活であらう。我々はかうして西洋の一女性に視られて、始めて千年の隣人の心持を知つたといふわけである。

著者はミス・キースなどいふよりも、寧ろお嬢さんといひたいやうなしをらしい婦人であつたが、旅行と美しいものを求める態度にかけては、並以上に勇敢であつたと見えて、

その見聞の一部には可なり獵奇的な興味もある。それを話すぎが是非話して聽かせようとする氣持で、至つて家族的におしやべりをして居るのは、どうしても旅行國の國民だけのことはあると思つた。著者の御母さんや兄弟たちも、私はあちらへ行つて皆知つて居る。

世間の讀者が感心させられるよりも前に、さぞあゝいふ身内の人たちが、寄り合つて楽しんでこの手紙を読んだらうと思ふと、私は微笑を禁じ得ないのである。

たとへば蘇州城内の風景は、京都の竹内栖鳳さんが、人間味に富んでゐるといつて賞めて下さつたなど報じてゐる。栖鳳先生の蘇州小景には、遠い昔の文化の奥ゆかしい姿がよく現れて、感歎の言葉も知らぬ程であつた。かういふ優れた名匠に賞められたのだからうれしいとも書いてある。曾てゴールデン・パウの著者のフレエザー教授にお目にかゝつた時と、同じやうな感動であつたとも記してある。藝術家又旅人としての娘らしさ、それが殊に自分等には珍らしいのである。

以前スコット君の「新東洋」といふ雜誌に、この著者が折々スケッチを載せて居た時には、

あなたの描く日本人はあまり眼が釣り過ぎて居ていけない。もうあなたの畫は決してほめてあげないなど、私はよく冗談をいつたものであつた。それでも私にはかうしか見えな
いのだからと、毎度彼女はひわけをして居たのであつたが、今回の『東側の窓』を見ると、
そんな眼をした東洋人はあまり出て居ない。永い間には多分我々と同じ様に見えて來たの
であらう。全體西洋人はいつも自分の家の東の窓を明けて我々を見ようとする。ところが
この本ばかりは、實は我々の家の西側の窓の外から、にこ／＼笑ひながらのぞいて見て居
るのである。

〔東京朝日新聞〕昭和四年十二月十二日

『千葉縣郷土誌』

——矢部鴨北著——

前代の地誌の中では、太田賴資の能登國名跡志などが、様式においてやゝこの書と近い
かと思ふ。この一つ／＼町村を見てあるくやうな態度が、實際は私撰の郷土誌の有難い特
色の一つで、筆者は一人で各町村を知つて居るのみならず、書かうとするに臨んで以前の
印象を呼び起し、どこか坂の上とか橋のたもととかいふ自然の地點から、もう一度その土
地を見直すやうな氣持になるので、平板なる記述にも幾分の紀行味ともいふべきものを付
與するらしいのである。官府團體の事業にはそれが望めない。縣誌郡誌の堂々たるものは
近來大分出て居るが、大抵は部門を立てあまりに體裁を整へて居るために、却てこれを讀

みながら、旅行をするなどいふわけにはゆかぬのである。

この書物は安房の湊村の一角に足を入れて、それから略路順に次々の町村に移り、終りに千葉の市へ還り付くところが、如何にも一覽記風に自然に出来て居る。縣人が我居村の條を読み始めると、知らず／＼隣からその隣へと、見て行くやうに書いてあるのは面白いと思ふ。前年刊行せられた『房總叢書』などを見ると、この地方にも私撰の地誌は少ないとはいはれぬが、多くは著者の住地を中心にした小さな圏内に詳しく、遠くへゆくほどいつの間にか傳聞や抄録になつてしまふ傾きがあつた。これは人間の根氣にも限りがあるから、まづやむを得ぬことと自分などは見て居るが、近年出てくる案内記類に至つては、故意に一地のみを力説しようとする結果、寧ろ周圍を閉却して反感を抱かせて居るものさへある。それでは折角の郷土誌の効果が、少なくとも一つは消えてしまふのである。

多くの縣では公共生活の統一のために、別に縣誌を要約した何々縣概覽といふ類の、手頃の讀物を出して居る様だが、その本が入用のありさうな人の手に開かれて居るのを、私

などはまだついぞ見たことが無い。それが少しでも縣民の結合に役立つのは、なほ澤山の改良の後でなければならぬわけである。その中でも千葉などは元來が大小諸領の寄合ひである上に、東京には近くかつ出入口は多いから、今までは實に單なる一行政区畫といふに過ぎなかつた。もつとも郡は役所が無くなつても、何だかまだ一體といふ感じが残つて居る。しかし隣の郡となると丸々の別天地で、相變らず村の名も正しくは讀めず、ましてやどの邊にあり何をして居る村かといふことは、互に少しも知らぬ人たちが多いらしいのである。それをせめては東京の名所ぐらゐに、親しくさせることが自治の第一次の準備であるが、さういふ事業には今まではまだ進んで居なかつた。千葉縣郷土誌は青年の讀み物にはやゝ六つかしく、古風な地名の考證に餘分の力を割き、地形や交通の解説には物足らぬ點もあるが、兎に角に縣を一つの研究物として、まとめて取扱つて見ようとした態度だけはよく見えて居る。かういふ様式の温かみある郷土誌は、今少し流行させ又改良して行く必要があると思ふ。

我々縣外の者の手をつけられぬ部分が幾らもある。風土山川は昔のまゝとはいひながら、明治以來の發展は偉大であつた。産業は急に進み人物は輩出して居る。これを土地人の素直な感情をもつて、語つてゆくことは大きな事業であつた。私は細かにこの一冊の本を讀んで居るうちに、始めてこの縣が國の重要な一區域であることを解したのである。著者の矢部鴨北翁はこの縣の古い教育者で、三十幾年かの昔から地誌を書く志を抱いて、村々を見て歩いたといつて居る。それだけの根氣とまた經歷とがあれば、當然にこの一書が成つてよいわけであるが、なほ我々が技能以上、努力以上に推服しなければならぬのは、その縣人として縣を愛して居る態度である。矢部氏の生地は東金の近在であり、今の住地は利根の河畔の笹川であるといふが、さういふ事實は少しでも記述の上には現れて居らず、どこもかしこも平ら一様に、すべて千葉縣の一部として書いてあるのは、何でも無い様だが我々には一寸出来ないことで、この公平な態度が全卷に行渡つて居て、十分に總體の効果を高めて居る。例へばごく近年に始まつた義家頼朝の傳説とか、殊には何天皇の御遺跡と

かいふ類は、著者自身が怪しいものだと思つて居ても、直言すると怒る人がまだ居るので、さも歴史のやうに書いてのける者も多く、中にはそのため特別の勉強をした場合もあつて、これが今までの地方誌の病と認められて居たのだが、そんな點にはこの郷土誌はごく無頓着で、うそかも知れないと平氣で言つて居る。かういふ舊跡の爭奪にばかり、妙に肩を入れて居た今までの地方人氣質をさらりと棄てさせるためにもこの本は有益であると思ふ。私ば文化の地方分權のために、この類の學問の眞價が今少しく有識者に認められ、府縣はまた金さへあれば何でも出來るといふ風な考へを改めて、今少しく個々の民間篤志家の功績に期待するやうになることを、かういふ書物を見るにつけて、殊に痛切に希望せざるを得なく。

〔東京朝日新聞「昭和四年四月五日」〕

『達磨と其諸相』

—木戸忠太郎著—

木戸忠太郎氏のダルマ採集は二十五年前に始まつて居る。その京都の自邸に達磨堂が建つてからも、十年は確に経過した。少しこの本の世に出るのが遅いなと思つて居ると、それはそのはずだといはせる以上に、途法も無い一大雄篇が準備せられて居たのである。著者の研究心には止めどが無かつた。それがもうよからうといつて出すのだから、びつくりさせられるのは致し方が無い。古來の何々大全といふ書物は、大抵はこれよりもずつと不完全である。

其代りには同時に色々の種類の讀者を捉へることが困難かとも思はれる。たとへば菩提

達磨の佛教上の地位、それが支那に渡り日本に來てから、新たに結び成した傳説と信仰とが何であつたかを、これ位要領よく編述したのも少ないのだが、それを通覽して利益を受ける人たちは必ずしも童戲玩具の精細なる記述に感激を寄せる者では無い。又畫材としての達磨大師の流行と不易、あしの葉に乗つて江を渡るといふ類の聯想が、如何に深く島國人の渴仰を誘つたかといふことも、この書によつて始めて心付く人は多いのだが、その序をもつて日本に張子のダルマの市が二百二十八ヶ所立ち、看板に少なくとも六百三十二、屋號に四百〇五以上、商標に二百八十何種のダルマ様が、現在利用せられて居ることを知つて置かうとする者はまづ少なからう。著者が卷末に件名索引をつけようとして、途中で斷念したのもつともなことであつた。實際この本は三種以上のサイクロペヂアを、合冊にしたやうな姿がある。

私の知つて居る限りにおいては、木戸さんは若い頃から既にダルマが好きであつた。採集の慾は年とつて強くなつたのかも知らぬが、因縁は却て西芳菰山人などよりも深かつた。

どんな小さな一つの研究でも、その執心が一生涯續くやうなら誇つてよい。それを何だか「おもちゃ」の類別に全力を挙げたといふのを、世間に對して相濟まぬやうに感じ、進んで達磨の教學的方面のみならず、更に一方にはこの名稱のあらゆる轉用、いやしくもダルマと名がつけば高橋是清翁の逸話まで、知つて居ないことは無いといふ迄に漕ぎつけられたことは、多忙な著者としては誠に由も無い捨身の修行であつた。無職渡世の私たち少數の者以外、誰も同情しさうにも無い忍苦の生活であつた。しかも萬卷の書を讀破して、漸くまとめあげられた達磨の正史的部門よりも、後半の達磨民俗誌の方が遙に光つてゐる。

これは要するに記事の内容が其ほとんど全部、第一次の知識であるがため、我々はいづれも生れて育つた土地の小事實だけは知つて居るが、これが日本全國に斯様な一致と異同とを以て行き渡つて居るといふ總現象は、この書の出る迄は著者以外に一人としてこれを知る者は無かつたのである。この區域においては木戸氏はコロムプスである。我々民衆の日常の生活の中にも、まだこれだけの未知の大陸があつたことが、同氏によつて發見せ

られたのである。一つの趨勢として見渡すときには、玩具も決して又小さな物では無い。

日本人は一般に小細工に長じ模倣が巧だとの評を受けて居るが、それよりもよく働いて居たのは新しい意匠である。たつた一種の不倒翁の「おもちゃ」が、百年もたたぬうちに北と南、關東と西國とのそれ／＼の地方色を出して、集めて見れば見る程、變化の奇に驚かされるといふことは、如何なことがあつても各民族の通例では無い。流行に幾つかの關門があり審査があつて、近代の大量生産主義の如く、耳を垂れて中央の統一の前に雌伏して居なかつた事實が、巧に排列せられた木戸さんの寫眞によつて、可なり興味深く我々の前に立證せられて居るのである。之は疑ふべくも無く、採集家の陶醉境であつた。あまり遠慮をせずに関け放してそれを見せることが、實際は又讀者の大いなる休養にもなるのである。この點にかけてはただ部分的に、『達磨と其諸相』は成功して居る。

達磨が日本に來てからの進化と成長、これは又一つの面白い題目であつた。座禪の宗門がどうかして彼を獨占しようとするに對して、一方に我邦固有の太子神は、ちようど牛若

丸が辨慶をつれてあるくやうに、この印度僧を手下として離さなかつた。その結果の永く残つて居るものに、たとへば猿引の太夫等の達磨忌があり、または目無しダルマの俗信があつた。私も實はこの諸國の實例が知りたい爲に、木戸氏のダルマ通と接觸しなければならなかつたのである。

顧みれば明治二十六年の第一高等學校寄宿舎以來、我々兩名の馬合ひであつた理由は幾つかあるが、それは概ね私事だからこんな際には述べない。たつた一つ面白くていはずには居られぬことは、本をこしらへて圖書館の分類係りに御迷惑をかけること、こんな點までが木戸さんは私の同志だ。僅かに標題だけによつてこの本を宗教の部にいたら、これだけ周到なる玩具製作史の研究が、抹香の煙の陰に埋もれてしまふだらう。さうかといつてこれを工業の部に置いたり、乃至はまた兒童教育の端の方につけて置くと、文藝繪畫彫刻などの交渉が、これほど詳しく述べてあるのを無駄にせぬとも限らぬ。たつた一つの問題を深く取扱つて居る以上は、類書ともいへまいし隨筆とは尙更認められまい。さうすれ

ば著者の大骨折に免じて、これだけは特別に五枚も六枚もカードを作り、何ヶ所にもその書名を掲げたものかどうか、それが氣になる故に私はもつと詳しい内容の紹介がしたかつたのである。

(「東京朝日新聞」昭和八年三月十七日)

『箋倭名類聚抄』

——野口恒重複刻——

繪師が繪をかくのと同じ様な氣持で、著述をしてゐたらしい學者がもとは多かつた。狩谷棟齋翁の『和名抄箋註』などもその一つで、これが版になつてどうすれば世にひろまるかといふことは、恐らく著者の計畫の内には含まれて居なかつた。少なくともかういふ書物

が活版でだせるものとは、百年以前の人は想像して居なかつたのである。

ところが明治初頭に政府が自ら印刷局を設置して、他の幾つかの珍らしい事業にさし加へて、この書の開版を企てたといふのには意味があつた。一方には新しい文化が連れ込んだ工藝の能力を、世に示さうといふ趣旨も無論あつたらうが、一つには又これを機會として活字の準備を豊富にし、當時萬能と認められて居た漢語教育を基礎づけようといふ腹もあつたのである。しかもその印刷局すらも、流石にこの大著述には閉口したのであつた。刻本の凡例を讀んで見ると、狩谷先生が心血を注いで精確にした多數の古體異體の文字は、論旨に影響の無い限り、當世の字體にさし替へたと斷つて居る。主として校正に參與した森立之といふ人は、掖齋門下の遺老であつたが、この人の意見で先生の定本を改訂した個所が若干あると傳へられるのは、これにも或はまた機械工業の實際との妥協があつたのでは無いかと思ふ。何にもせよ漢式文運の隆盛を極めた社會ですらも、なほ原形のまゝを複製することがむづかしいほどに、細密でまた雄大な研究であつたのである。

それを今日のやうな漢字制限時代、人の名前と地名だけを後に取殘して、その他は千何百字とかを知つて居ればよいことにしようといふ世の中に、もう一度くり返して見た人があるのだから驚かされる。これを企てた野口恒重氏の動機は、詳しく聴いても私にはのみ込めなかつたが、少なくともその實驗の成績だけは好い參考であつた。同氏は一方に本の生産費を小さくするために、八ポイントといふ厄介な字型を擇び、三分アキといふ新しい字詰を採用した。日本現存の活字中、『箋註和名抄』に使用し得た數が八千字、それから若干の不便を辛抱して、サク字と稱する二つ割の組合せをしたものが千何百とか有つた外に、更に一萬二千個の木活字を新刻させて、補充しなければならなかつたさうである。木活紙型の流し込みは、さういはれて見てやつと心づく位に無難に出來て居るが、その代りには校正の面倒であつた事は想像に餘りがある。百ページばかりも進むと忽ち活版所が降参し、八箇所の印刷業者から斷られて、九軒目の手で漸くのことに二卷千二百ページほどの四六判が出來上つた。その期間は二年と數箇月、帳面は當然に今日流行の赤字であつたといふ。

根氣にもせよ片意地にもせよ、日本で無くてはちよつと出現せぬ奇觀だと思ふ。

この頃仲が悪くなつたからいふわけで無いが、全くこの漢字といふものでは我々は餘計な苦勞をして居る。最初便利だと思つて借用をした際には、豫想しなかつた事ばかり起つて居る。歸化人同様の優秀なる少數模倣家を除く外、國民は全體として決して外國語の利用に巧でなかつたことは、歴代の古文を回顧して見る者の、だれでも感ぜずにはをられぬ所であるが、それでも手を着けたからには中途から戻れない。それで一千年の辛勞を積重ねて、やつと到達して見たのが狩谷翁などの境地であつた。さうするともう歡迎會と送別會とを一緒に開かうとして居るのである。明治の教育なども澤山の外國語音の二音節を、やつと耳で聽いてもわかり、自分でも使へるやうにしたかと思ふと、はや背後には新語辭典の、片假名の暗記に忙殺される時代が迫つて來た。いはゆる活版文明の展開は、目ざましいけれども丸で花火のやうだ。

残るはたゞこの刻苦精勵の記念碑だけであらう。掖齋先生の箋註は内閣の文庫に、その

二通りの稿本が、今も保存せられてある。その一つは初稿本とおぼしく、いはゆる朱紫縦横で、原紙を没する程のはり紙がある。第二はその淨寫本であるが、これも再び眞黒になる位の補修改訂があつた。學者の精力がこれほどまで、一つの事業に集注して居るのは貴とい。私はめつたに座右の印刷局本も、開いて見ぬやうな情け者であるが、なほかの原稿本を思ふたびに、奮ひ起つやうな感激があり、従うてまたこの本にも名畫の寫眞のやうな懐かしさがある。殊に永いなじみの漢字との別れに臨んで、かういふ念人の覆刻本が現はれたといふことは、何か當事者も説く能はざる大きな意義があるやうな氣がする。

〔東京朝日新聞〕昭和六年十月三十日

序 跋 集

佐喜眞興英著『女人政治考』

佐喜眞興英君の著述は、我々が久しく怠つて居た大事業の端緒であつた。學界の睡を驚かす警鐘の如きものであつた。この大なる功勞者をして、自ら之を完成せしめ得なかつたのは、此上も無い遺憾であるけれども、先驅の榮譽は永く同君と之を争ふ者は無い。家族友人等はせめてこの小さき記念物に由つて、深き悲みを慰むべきである。

我々が近年始めて、南方諸島の神道の片端を窺ひ、女性指導の力がなほ甚だしく衰へざる

ことを知るや、顧みて既に湮滅に歸せむとする日本の固有宗教の中にも、曾ては巫女の任務の最も重要な時代があつて、彼と是とは固より根源を共にし、その細心なる比較と類推とに基づいて、始めて前期社會の真相を明らかに得べきことを感じたのみならず、史學今日の興隆を以てして、なほ透徹を期し難かつた國初の民族生活、部曲家門の特殊組織、及び必ず之に起因したかと思ふ若干の事實が、例へば沖繩の古史の序を追うて近頃漸く闡明せられた如く、やがては亦此方面の研究に由つて、再び鮮かに國民の知識に蘇へるの日にあべきことを望んだのであつた。しかも些々たる眼前の成績に自得して、學問進展の餘地を信じようと欲せぬ人々に向つて、未拓の沃野今なほ此の如く廣大なることを立證する爲には、相應の用意が必要であつた。少なくとも二三外國の篤學者が、此よりも遙かに乏しく且つ埋もれたる資料を捜査蓄積し、刻苦して僅かに齎らし得たる論斷が、偶々我々の坐して採り、招かずして迎へ得たる豊富なる收穫と、歸する所乃ち一なることを開示しなければならなかつた。其準備の困難を憚り、決行の勇氣を缺いた我々は、所謂薄志の評を免

かれ得ざる者であつた。

故に佐喜眞君十餘年來の業績に對しては、其方法の適否を批判するの資格は、未だ何人も之を持たぬのである。今は單に此書が世に問はれて後、故人の意圖果して弘く認められ、蕞爾たる洋中の孤島にも、書傳の未だ録せざる莫大の新史料、文字以上の精彩ある記録が、充ち溢れて學徒の考察を待つことを覺える者、もしくは自分の過去に關して何等の觀照も無く、空疎に異國の言説を敷衍することの、殆ど無益の勞なるを感じ得る者が、相繼いで現れ來るの時を想望するの他は無いのである。

佐喜眞君は多識多讀、之に加ふるに平民生活に對する豊かなる同情と、慧敏なる理解とは共に天稟であつて、優に此方面の學者として、大成すべき條件を具備して居たのだが、悲しいかな境遇が之を許さなかつた。仕官の爲に東西に流寓して、學友の甚だ乏しかつたことも、亦恐くは忍び難い寂寞であつた。たゞ此書の漸く刊行せられむとするに臨み、改めて故人に代つて追懷と感謝とを禁じ得ないのは、一二最も親切なる先輩の聲援である。

自分が始めて佐喜眞君に逢つて、其研究の一端を聴くことを得たのは、故穂積陳重先生の書齋であつた。先生は夙にこの一箇沖繩青年の學問が、他日祖國の文化に貢獻する所大なるべきを認め、彼を激勵して五たび其稿を改めしめる迄の自信を與へられ、更に又其知識を我々に紹介して、後進と共に道を究めようと企てられたのみならず、今又深く將來ある佐喜眞君の夭折を嗟嘆して、此遺文の爲に龍門原上の辭を題せむことを約せられたのであつたが、それは終に希望すべからざるものとなつた。

佐喜眞君の知音としては、なほ舊師清水駿太郎氏があつた。濟々たる沖繩第二中學の出身の中に、此人あることを自分が知つたのは、全く清水校長が慈父の如き情熱を以て、彼の多病を憂ひ、彼の完成を祈念した切々の言葉からであつた。今に於ては先生は寧ろ、此の非凡の才能を見出すの明無くして、彼をして自ら知らず、遂げざる大抱負の爲に空しく奮起せず、故郷の島に留まつて、安らかな讀書子の生涯を、送らしめなかつたことを悔いて居られるかも知れぬ。果して然りとするも、それも亦自然なる人間の私情ではあるが、

なほ我々は新日本の國學の爲に、清水氏の推獎と刺戟とを多謝すべき理由を有する。

實はこの人生の二つの用途に付ては、我々も常に取捨に迷ふのであつたが、獨り佐喜眞君夫妻に在つては、夙に毅然として決する所があつたらしい。夫人松代子が隠れたる學者の眞價を疑はず、その愛と感化とを受けて、終始從順なる助手を以て自ら任じ、筆寫整頓の一切の煩務を引受けた上に、今又此書を公表したる後、更に之に基づいて自分も同じ學問に進まんとして居るのは、誠にいさぎよい日本女性の一例であると思ふ。新たに提出せられたる本書の興味ある題目が、是と一脈の下に通ふものあるを感ぜざるを得ない。

佐喜眞君はその精進の生涯から、なほ二つの有益なる小著を我々に供與して居る。其一つは『南島説話』であつて、純眞なる沖繩の口碑集、昔話採録の好典型を示し、第二は『シマの話』で、宜野灣新城の故郷の村組織に於て、太古以來の共有制の面影を見出した。共に『爐邊叢書』の一冊として刊行せられ、後者は易簧の前數日、辛うじて世に出たものである。自分が同君の著に序せんとした動機には、叢書編者としての忘るべからざる感謝が、大に

加はつて居るのは勿論である。

(大正十五年六月)

高木敏雄著『日本神話傳説の研究』

高木君とは一年半ほどの間、殆ど毎日のやうに往來して居たことがあつた。其頃はまだ同君の學問が、現今の如く盛に行はれぬ時節であつて、書物や資料の蒐集に色々の不自由が有つたのみで無く、一般に外部の事情には、慷慨せねばならぬやうなことが多かつた。又直接研究と關係の無い仕事に、大切な時間を割く必要も有つた。其上に高木君の氣質にも、ちつと書齋の忍耐を續けて行けるだらうかを、危ぶましめるものが實はあつた。その

變化の多い、寧ろ氣ぜはしない生涯から、此だけ立派な多量の製作を遺して往つたと云ふのは、如何にも羨むべき天分であつたと思ふ。

私は外國に旅して居て、高木君が遣つて來ると云ふ噂と殆ど同時に、其突然の訃音に接したのであつた。其時もしみじみとして、想ひ起したことであるが、同君は曾て友人に向つて、自分の生活には七年ほどづゝの周期があるやうだと謂つた。研究の興味が頂點に達したと思ふ頃に、内からか又外からか、新たな原因が現はれて、其爲に學問を中絶すると謂つた。さうして又自ら其天分を理解して居たのだから、恐らくは煩悶の生活であつたらうと思ふ。十分に長生して、世上が其功績を認めるのを見ることの出来なかつたのが、殊に痛はしく思はれる。

今でこそ我々は、神代卷の或記事を神話と見るとを許され、所謂田夫野人の日常行事の中から、古日本人の思想と宇宙觀とを發見しようとする態度を嘲笑せられずに居られるが、高木君の初期にはそれは無謀なる大膽であつた。そればかりか西洋の古典派の中にも

Mythos と云ふ語を遠東有色人の昔話などに應用することには、大なる故障があつた。高木君の新らし過ぎた學問は、恰かも新らし過ぎた葡萄酒の如くに、舶來品歡迎者にすらも、なほ賞玩せられなかつた。其學問が年を経て正に大に熟し、友を會し盃を擧げて、陶然として酔うてもよい時になると、もう高木君は遠く辭し去つて、この知識の嚮宴に參與することを得ないのである。ほんの僅かの年代の喰ひ違ひが、此の如き不遇の原因となり、言ふにも足らざる平凡なる妨害が、常に人間の事業を完成せしめまいとして居るのは、眞に悲しむべき世の習ひであつて、骨肉縁者の永く哀慕の情を抱く者は勿論、兼て高木氏の劃時代的學風に向つて、感謝し推服する我々としても、本書に由つて其研究の殆ど全部が、散佚を免れ得たことは大なる悦びであり、又大なる慰藉である。

假にこの遺篇が概ね十餘年前の舊著である爲に、既に解決せられた問題であり、もしくは未了の斷片であつたにしても、その記念としての價值には増減が無いのであるが、しかも事實は今日の學界に於て、不幸か幸か本書の公刊を、不必要とするに足るだけの事由が

まだ寸毫も無いのである。

比較神話學が高木君最初の力作であり、日本傳説集が明治末葉の大蒐集であつて、共に最近に覆刻せられたことは既に人が知つて居る。此以外には若干の童話集などがあつた。今までの話の本は何れも話し方がよく無い。無用に小兒の智力を誅求し、且つ前代と異國とに對する同情を變壓する。之を改良して見るのだと云ふことを、書物の出るたびに聲明して居られた。しかも其等の本は早く世に隠れて、話し方の改良はまだ十分に行はれて居ないが、あの時分の愛讀者は今や成長して、恐らくは各自の美しい回想の綾に高木君を織込み、更に縁あらば此遺稿を讀むことに由つて、著者の親切をなほ一つ上流の泉から、掬み上げることが出来るであらう。自分の追懐もやはり本書中の一篇、「驢馬の耳」と結び付いて居る。東方に於ては新羅第四十代の君主、景文王の物語として傳へられるのが、是亦幽恠微妙なるミダス王の旅の姿の一つであつた。黄金も威力も今は廢墟の土に歸して、獨り其耳の途方も無く長かつたと云ふことばかりが、若蘆の葉に風の吹く毎に、百千年を経て

なほ我々の耳に響くのは、やがてはフォクロアの學問の、情味と眞實とを意味するものでは無からうかと、語り合うては屢々微笑した、その高木君も今はもう居らぬのである。

(大正十四年四月)

土橋里木著『甲斐昔話集』

一

先だつて富士北麓の上九一色といふ村から、百數十篇の民間説話を集めて見たといつて、土橋里木君がその出版の相談に出て來られた。暮に亡くなつた祖母の話が、その中に八十以上もあるので、記念のために一冊の本にして置きたいといふことで、私は孫なる筆者と二人で取つた、そのおばあさんの寫眞も見た。

採集者の中には、久しく方々を尋ねあるいて、一つづつ昔話を貯へて行く人もあるらしいが、その勞苦の大なる割合には、効果は却つて斯ういふ一人の管理者から、引繼いだものに劣るやうである。前年我々が世に紹介した『紫波郡昔話』なども、岩手山の麓に近い煙山村の小笠原謙吉君の祖母が、又その祖母から聞いたといふ話を書取つたもので、この方は數が百を越えてゐた。同じく岩手縣で、上閉伊郡の江石たにえといふ老女は、一人で約三百ほどの昔話を知つて居た。佐々木君の『老嫗夜譚』はその三分の一ばかりを本にしたもので、これなどが先づ今までのレコードである。

一番感心するのは、昔話の登場人物などは正直不正直の二人の翁、和尚と小僧、難儀する美しい織娘、大力、智慧者、運の好い貧乏人等の、至つて僅かなる人數に限られ、さうで無ければ天狗とか狐狸猫鼠、舞臺も廣い野の一軒家だの、荒れはてたる山寺だのと、大よそ八つか九つにきまつて居るのに、よくもそれ／＼の話の筋を別々に、語りわけることが出來たものだといふことである。その代りにさうした物覚えのよい老人は、決してどの

村にも一人づゝ居るといふ程に澤山は無かつたのである。以前も稀有であつたが今日は更に減少せんとして居る。それだけの能力のある人ならば、必ず何か新らしい方面に、その長所を發揮して居るからである。

昔話を聴く人の群といふものは、國により又時代によつて、著しい構成の相異があつたやうである。現在のところでは、まづ第一には人に話をさせながら、すやくと睡つてしまふやうな幼ない者、それ程で無くとも小學校に行く前の、何もする事の無い二三人が普通の聴衆で、従うて昔話の重話化は完成し、同時にその文藝は各家庭の私有に屬することになつたが、無論これは最近代の變遷である。以前とても兒童は無論傍聴者、又往々にして次の時代への運搬者であつたらうが、少くとも聴き手は彼等のみで無く、又その連中も多かつた故に、昔話にはなほ幾つかの「子供のためによくない」點が残り、又同じ話が廣く公共の傳承になつて居たのである。

これが民間話の時代毎に、又各民族毎に、それ／＼別の用意をもつて、解説せられな

ければならぬ理由である。日本の昭和時代が、特に外國學者の研究を取次ぎして居ればよいといふ人々を、謝絶しなければならぬ所以である。今日の成人は童話の細部を聴き分けることを面倒がり、單に標目と自家一流の幼時の暗記とによつて、國と國との數千年前の一致をさへ論じようとして居る。ところが一箇の猿婿入の話にすら、よく見ると喜劇から悲劇までがある。おしまひは同じ「市が榮えた」に歸着する話ですらも、一つの郡村に在つてなほ家々の話し方の差異は、今まで氣づかなかつたといふのみで、随分著しいものがあるのである。これが果して親切なお婆さんの、手料理の鹽加減だけに基づくものかどうか、それがまづ問題になるのである。

二

どうせ子供にして聴かせる昔話だから、何とあらうとも構はぬと思ふ人が今は多いが、

思ひの外出たらしめは少ないものである。それが全国的に根幹は一致して、細部は一つ村でも時々變つて居るといふのは、意味のあることで無くてはならぬ。考へて見ると日本のお婆さんは、百の八十人までがその家で育つた人で無い。嫁に来てから覺えた話もたまにはあらうが、嫁には屈託があつてそんな事にかゝつて居られない。だから大部分は筆筒長持と共に、親里から運んで來たものである。即ち昔話もまた隣村隣郡と縁組をして居たのである。

我々の實驗によると、話の好きは一つの天性であつて、中には年とつて孫たちが眼を圓くする頃まで待つて居られず、聽いて間も無く之を誰かに傳へようとする乳母女中姉さん叔母さんなどがある。母にも若いうちから昔話をしてくれるやうな善い母が、以前はしばしばあつたのであるが、これはその志があつても機會はさう多くなかつた。第一によほど話をせがむ兒が居ないと、釣りに出すことがまづむづかしかつた。例へば人でも來るとすぐに止めてしまつて、他の事を考へるのが若い女性の常である。これに反して老人には更に

懐古といふものがある。記傳性とも名づくべきものが、世の別れに近づくほど盛んになつて來る。殊に心理學者に考へてもらひたい現象は、愛に堪へない孫たちが膝の上に来ると、忽ち各自のその齡であつた頃の記憶が、可なり鮮明に蘇つて來るらしきことである。老の物忘れの霞のやうなものの中から、昔話の面白さだけが青々と日に照る故に、手に摘んでこれを示さざるを得なくなるらしいことである。

これが民間説話の流布形態の上に、大なる影響を與へるのは恐らく議論の無いことであらう。それをやゝ詳しくいふと、昭和五年の小兒は、大體において明治の始の頃に子供であつた人の話を聽き、現在の説話愛好者たちは、弘化嘉永の際に、安永天明頃に生れた人の記憶を、復活させて居たものを、引繼いで居たわけになるのであつて、巖谷小波氏等の事業がもし幼なき民心を動かして居たとすれば、それが効果を生ずるのは今から廿年ばかり後と、又それから四五十年の後と、二回位のものだらうといふことにもなるのである。だから家々の昔話の特殊性は、又斯ういふ點からも説明することが出来る。

ところが今日の如き聴衆と、今日の如き辯士が會同して、説話を民間に受け継いで居た時代が、果してどれだけ續いて居たかといふ事が、また一つの問題となるのである。一人の祖母又は祖父より、二、三の兒童へ氣安く授受するだけならば、今少し新らしい話の種も加はつたであらうし、又一つの話がこれほどまで遠くある理由はない。桃太郎猿蟹の如き本になつたものは別として、又草木や鳥獸の物を言つたといふやうな、大昔から流布して居るといふものは取除いて、我々の國語を使ひ近世の生活に浸つて居なければ、聽いても更にをかしくないといふ笑ひ話、たとへば團子の名を知らなかつたおろか婿、馬の尻にも十三佛の御札を貼りなさいと言つた話などが、北は津輕の突端から、南は九州の山の中の村まで、聽いてにやりとせぬ青年が無いまでに、廣く行渡つて居るのは何故か。日本人はよく／＼入交つて一つになつた種族だといはれるが、まだ我々の婚姻の方は、今でもそれ程までは發達して居ない。乃ち説話の運搬者は、以前は家庭の爺婆以外に、別にその機關があつたのである。

三

日本前代の説話輸送業者のうちで、特に歴史的なるものは座頭であつた。記録にもその痕跡はほゞ認められるが、なほ自分は別に説話それ自體からも、この事實を證出することが出来ると思つて居る。昔我邦が盲人のむやみに多い國として知られて居たのは、ひとり衛生状態の然らしめたといふだけで無く、寧ろ盲でも永く生存することを得た結果であつた。彼等は按摩を業とし、音曲をもつて世を渡る以前から、既に身に適した職分があつて、師匠と弟子の關係を以てこれを傳へて居たのである。大名小名の同朋衆又は御伽の者といふ群で、純然たる口と耳との奉公をして居た者は彼等のみであつた。盲が旅行を盛んにすることも、また日本だけの特徴といふべきで、戰國時代にはしば／＼これを探偵細作の役に利用して居たといふのも、つまりはこの連中が耳も至つて鋭く、聽いた話は必ずその急

所をつかんで、他日人に語ることを能くしたからであつた。彼等の集つて来る中心は方々にあつたらうが、少なくとも京都には何ヶ所かの、昔話交換所があつた。人の機嫌に應じて作り換へ敷衍することもまた彼等のお手の物であつた。だから我々の昔話には、特に盲目を主人公にしたものが多いのである。眞面目な例では平家後日談ともいふべき日向の景清、これは後つひにこの徒の祖師の如くにもなつた。峠の辻堂に泊つて化物に逢つたといふ話も二通りあり、盲がふざけもしくはしくもつたといふ道化話に至つては無數である。

彼等自らで無ければ、何人がそんな物ずきな話を傳へようか。

それといふのも成人に熱心な聴衆があつたからで、今日のやうに兒童ばかりが相手であつたら、到底これだけの運搬は望めないのである。盲こそは日本の珍らしい特色であるが、その他の旅人の見ず知らずの田舎に入つて、大家の座敷で一飯の恩に有りつき、又は一夜の宿を借る者にとつても、これが愛嬌といふ以上に、最も簡便なる宿賃であつたことは、どの國でも一樣の慣ひといつてよい。西洋の學者も女性は民話の保管者に過ぎず、男子が

常にその流布者であつたことを認めて居る。或は帆船時代の風待の滞在を、特に話の傳はる機會の如くいふ人もあつたが、港の輸入だけでは農村の事實は説明が出来ない。グリムの愛讀者などは早く心づいて居るだらうが、あの話に出てくる仕立屋靴屋などが、何故にその職業であつたかは話だけではわからぬ。即ちこれもまた曾て話をした者が、旅をしてあるくさういふ人たちであつた事を、語るものと見る他は無いのである。日本では牛方、馬方、染屋、桶屋などが昔話によく出て来る。もちろん旅する職人は他にも色々あつたが、中でもこの連中が特に昔話がすき、又は上手であつたのである。

短い言葉でいふと、昔話の現存には三つの力の結合が必要であつた。一つには保管者としての女性、二つには輸送者たる諸種の職人、三つにはその機會を作つた成人の群であつた。昔話はなんぼ昔であつても、路傍の立話などで出来るもので無い。必ず夜分であり、冬の長夜であり、また庚申や日待の如く、いはゆる伽をして起き明す夜であつたのである。女は遠慮深い者であらうとも、さういふ機會まで家々の兒童と共に、忘れずに語を受持し

て居る役目だけは盡して居た。甲州の九一色はもとほ工一色で、古くは職人を出して貢租に換へた村であることは、前に『都市と農村』の中にも書いて置いた。故に近世に入つてまで、其村民の大半は旅商人であつた。それが故郷に戻つて来て老人となり、靜かに村の夜話の夜を楽しんだ有様が、僅かにこの一巻の昔話集によつて忍ばれるとすれば、この學問も決して今日の童話協會ばかりには、任せて置かれぬといふことになるであらう。

(昭和五年六月)

佐々木喜善著『聽耳草紙』

佐々木喜善君のこれ迄の蒐集は、本になつたゞけでもすでに三つある。その三つの中一番古いのは『江刺郡昔話』であつて、これは我々の仲間では記念の多い書物である。二十二

年程前、初めて佐々木君が遠野の話をした時分には、昔話はさ程同君の興味を惹いてゐなかつた。遠野物語の中には、所謂「むかしむかし」が二つ出てゐるが、二つとも未だ採集の體裁をなしてゐなかつた。それが貴重な古い口頭記録の斷片であるといふことは、ずつと後になつて初めて我々が心づいたのである。それから十年餘りしてから、我々は松本君と三人で、東北の海岸を暫らく一緒に歩いたことがある。その時に丁度佐々木君は江刺郡から來てゐる炭焼と懇意になつて、しばし山小屋へ出掛けて、いくつかの昔話を筆記して來たといふ話を私にした。それは非常に面白いから、出来るだけその形に近いものを公けにする方がいゝといふことを、同君に勧誘したのもその時である。

それから二年過ぎて、私が外國に遊んでゐる間に、『江刺郡昔話』が出版せられたのである。今度新たにその本を取出して讀んでみると、佐々木君が先づ第一に、聞いた話の分類に迷つてゐる事がよくわかる。口碑と言つてゐる中には、社寺や舊家の歴史の破片と共に、昔話から變形したものもまじつてゐるのだから、今の言葉で言へば傳説にあたるものである。

それから民話と云つてゐる部分は、近頃何人かゞ實見した話として傳へられてゐるのだから、直接「むかし〜」の中に入れられないのは當然だが、これとても内容の一致があつて、何人かゞ「むかし〜」から、これへ移入したといふ事が想像出来る。

さうしてこれが今我々が興味を以て、考へようとしてゐる世間話といふものである。現代の世間話は新聞などの力で、事實と非常に近くなつたけれども、以前は交通が不便で、さう〜は其世間話の種もないから、勢ひ古くからの文藝が、その中へまぎれこんで居たのである。東北といふ地方は、何時までも昔話を子供の世界へ引渡さずに、大人も参加して楽しんでゐた結果、昔話がより多く近代的な發達を経て居るのだが、この事實が又この本で可なりはつきり證明されてゐた。話の分布に最も多く参加した盲法師、すなはち奥州でボサマと言つてゐるものの活動の痕を、跡づけてみようと思つた、大なる動機は茲にある。

ボサマの歴史は近頃になつてから、全く別の方面からおひ〜知られて來たけれども、

純粹なフォークロアの方法によつても、東北地方でならば調べることが出来る。例へば南部で言ふ「雁取爺」が、我々のお伽噺の花咲爺になつて來る迄の經過は、あちらではこれを文藝として改造した作品が、現に残つてゐるのだから具體的にその經過を説く事が出来る。ボサマは人を喜ばせるのが職務だから、或程度までの繰返しを重ねると、今度は意外な作りかへ、もしくは後日譚の方へ出て行かうとする。眞面目であつた話をやゝ下品な滑稽へ持つて行かうとする。従つて話題が發達して來る。同時にこれを聴く者の態度も、幼少な子供等とは違つて、昔ならそんな事があつたかも知れぬといふやうな信仰は少しも持たずに、これを純空想の作品として受け入れようとする。即ち之に由つて今日の落語なり滑稽文學なりの、文字以前の基礎を造つてしまつたのである。大げさに言ふなら、今日の文藝との間に橋をかけたやうなものとも言へる。半分以上類似したやうな話でも、この意味から我々が出来るだけ多く集めてみようとする理由が、初めて此處に生じた。それはちよろど佐々木君のやうな、飽きずにいつまでも集められる蒐集家が非常に役立つた。

佐々木君も初めは多くの東北人のやうに、夢の多い、鋭敏といふ程度に感覺の發達した人として、當然餘り下品な部分を切り捨てたり、我意に従つて取捨を行つたりする傾向の見えた人であつた。それが殆ど自分の性癖を抑へきつて、僅かばかりしかない將來の研究者のために、斯ういふ客觀の記録を残す氣になつたのは、決して自然の傾向ではなく、大變な努力の結果なのである。

これまで普通に郷里を語らうとしてゐた者の、しばし陥り易い文飾といふものを、殊にこの方面に趣味の發達した人が、己を空しくして捨て去つたといふことは、可なり大きな努力であつたと思はれる。問題は將來の研究者が、斯ういふ特殊の苦心をどの程度まで、感謝し又利用する事が出来るかといふ點にある。私は以前『紫波郡昔話』『老嫗夜譚』が出来た時にも、常に佐々木君のこの人知れぬ辛苦に同情しつゝ、他方では同君自身の文藝になつてしまひはせぬかと警戒する役に廻つてゐたが、もう現在ではその必要は殆ど無からうと思ふ。能ふべくんば今後この採集者に若干の餘裕を與へて、自分がこれほど骨折つて集

めて來たものを、先づ自分で味ふやうにさせたいものである。それには單純な共鳴者が此處彼處に起るだけでなく、この人とほぼ同じやうな態度と熱情とを以て、將來自分の地方の「むかしむかし」を出来るだけ數多く集めてみる人々が、次々に現はれて來ることが必要である。

(昭和五年十二月)

高田十郎編『大和の傳説』

大和の人々に

日本で一ばん古い國、大和の傳説が今はどうなつて居るか。都が北に遷つて後の千百年間に、大和の住民はその傳説をどれだけ殖やし、はた又以前からあつたものをどういふ風に改良して來たか。何を忘れ何をましがへ、又如何なる話を身を入れて聽いて覺えて居た

か。それを知りたい爲にもこの本の出るのを待ち兼ねます。

又皆さんがどういふ人たちから、特に傳説を聞き出さうとなされたかも、私たちは知りたくてたまらぬことです。學問のある先輩から、教へられた話はきつと學者くさい。字もよく知らぬやうな小さな家の年寄が記憶して居た口碑には、書物に書いて無いことが含まれて居ます。誰から聴いても傳説なら同じだらうと、うつかり思つて居て私たちは失敗しました。あれ程色々の記録を持つ百帝の都の國から、もし大昔にも口から耳へ、ただ語り傳へて居た信仰の残片が、僅かなりとも拾ひ集め得られたのだつたら、我々は必ず驚嘆し、又狂喜しなければならぬであらうと思ひます。

高田さんの話では、今度の蒐集は一先づ市郡部別に、近い處のものから排列せられるのださうですが、是は行く／＼はもつと増加して、改めて問題毎に、又は似た話によつて分類せられる準備であらうと思ひます。もつと數多くの似よつた傳説が、後から出て來ることを豫測しての計畫でありませう。それが又私には何よりも楽しみです。町と村とでは人

の心持ちがちがひます。同じ昔の一つの不思議を、見やう考へやうによつて色々と語りかへて居ることは、比較によつて始めて明かになるので、是には更に一度も英雄の足跡を戴かなかつた、遠い府縣の傳説と並べて見ることが、又大いなる参考であります。日本では既に九州でも奥羽でも、それ／＼自分の土地の言ひ傳へを採集して、大和の傳説の本になつて出ることを、もう餘程前から待つて居たのであります。

『大和叢書』の發刊に對しては、私は數年來の熱烈な主張者の一人でありました。他の地方では中々活版が容易で無くて、今でも篤志家が大切な時を割いて、謄寫版で僅かな部數を、同志の間のみに分けて居るのであります。其爲に自身の採集と研究が妨げられるのみならず、最初から珍本であり、程無く稀覯本となつて、後々の利用者の手には届きませんが、この叢書だけは奈良に旅をする人だけには、必ず目に觸れ手に取られ、國の隅々まで持つて行かれることになるでしょう。それだけでもこの學問の大いなる飛躍であります。私は日本の平民史學の爲に、是非とも此叢書の數十版を重ねることを希望します。

(昭和七年十一月二十八日)

青木純二著『山の傳説』

一

日本の山の傳説では、三山の争ひといふのが古くから知られて居る。曾て大和國で有名であつたものは、今はたゞ萬葉集の歌であるが、奥州では北上川の上流などに、岩手山と早池峯との仲の悪い理由として、同じ語り草がまだ生きて行はれて居る。或は是も單純なる高さくらべの話から、後々面白く成長したのかも知れぬが、それにしても其中に立つ美しい山の名が、誰謂ふとも無く昔から姫神山である。どうして此様な素朴なる物珍らしさが、久しい人間の世代に亘つて、飽きられもせず傳はつて來たものか。それが先づ我々の

不思議の一つである。

しかも是よりも今一段と短い話、單に二つの山が喧嘩をしたといふだけの話ならば、殆ど無い府縣は無いといふ程に數多い。さうして今でもまだ成長して行かうとして居るのである。是がもし作者のある文藝であつたら、又かと言はぬ者は無かつたことと思ふが、此方は既に何十世紀の間、引續いていつも同じやうなことを繰返して居たのである。例へば筑波は富士よりも遙かに低い山であるが、天の大神の恩寵を受けたことは、彼に比べて何倍か豊かであつた。といふ由來を詳かに、又人間らしく叙述したものは、是も奈良朝期の常陸風土記であつた。近世各地に行はれた同種の傳説は多いけれども、概して是よりも簡單であり且つ更に子供らしく、故人が豫め次の時代の爲に、布衿修飾合理化の勞を、執つてくれたかの觀あるも一奇である。但し私は此點に關して、多分正しからうと思ふ一つの解釋を持つて居る。私の解する所では、傳説には夙くから二通りの鑑賞家があつて、文字無き凡人大衆は一つの群を爲し、所謂詞人墨客は他の一つに屬して居た。記録は素より第

二の者の管掌する所であつた故に、何が傳ふるに足るかの判別に關しては、彼等の趣味と知識とが獨り働き、一方は單に之を文學として尊敬するばかりで、傳説として受入れぬものが多かつたのである。以前はこの二つの群の間に、可なり著しい階段があつたから、或は理解の能力もちがつて居たかも知れぬが、主としては信じようとする態度の差、もしくは古い形を愛する心持の有無であつた。耳から承け續いたもので無ければ、口から傳へようとしなかつた凡人の數が多く、それが又文士によつて輕しめられ、齡せられなかつたといふことが、偶然にも記録以前の傳説を、色々と民間に保存して居てくれたのである。青木純二君の新たなる書物が、古い記録の最後のもので無かつたか否かは、言はゞ同君が右二通りの鑑賞家の、どちらの側の人であつたかによつて決せられるわけである。

二

次に此書物を讀んで行くうちに、必ず出くはずであらうと思ふ今一つの不思議は、この所謂日本アルプスの山國に、記録最古の「三山の争ひ」のみならず、更に今一段と平凡なる二つの山の高さくらべまでが、まだ一向に發達して居らぬことである。著名な一萬尺が嶺を連ね、山といへば誰でも先づ思ふ中部日本の高山幽谷に、是が缺けて居るのは奇怪のやうにも考へられる。しかしこの點も私には大よそ説明が付くやうな氣がする。それは一言でいふならば傳説が主として平野の産物であるからであつた。山が自ら語つたもので無いからであつた。我々の信仰が傳説に化して、末には國擧つて之を説き、千年を過ぎてほほ當初の若々しさを保存し得たといふのも、要するに之を聽く人があり、且つ多數であつたからである。ところが山國はもと却つて其要件を缺いて居た。だから話頭は常に山を望む人によつて提起せられたのみならず、恐らくは同時に双方の山を望み得るやうな地點に於て、高さ競べや妻争ひの物語は、夢み始められたと思はれるのである。大和の三山は布留懸向の東の高みから、殊に夕の空が其輪廓を際だたせ、又は川霧の上に峯ばかり浮んで見

えた時に、最もその傳説の印象が鮮かであつたらう。今日行はれて居る多武峯^{たぶのみね}と高見山の
高さ比べなどは、それからすつと南の、紀の川中流の村里まで行かぬと、あゝいふ空想は
抱かれさうにも無い故に、後になつて追々と發達したのである。勿論富士と淺間や鳥海山
とのやうに、一度に二つの山を見ることの出来ぬ例も多いが、是は所謂遠近人が見て過ぐ
るやうになつてから、旅の話として次々に承け傳へたものと見られる。山の神秘の久しく
閉されて居た土地に、新たに村を開き小屋を掛け、多くの旅人が來り宿るやうになつてか
ら、始めて發生し進化した傳説が、更に別種の興味ある地方色を呈することは、此書が恐
らくは始めて之を證明して居るので、民族の古い傳説を知りたいとならば、寧ろ都府四周
の年久しい耕地の間に、之を尋ね求むべきものであつたのである。

だから又記録の古さといふこと、傳説其ものゝ古さとの間には、普通に想像されて居
る程の深い關係は無かつたのである。例を山々の争ひに取つて言ふならば、香山^{かみやま}耳成山の
妻争ひが萬葉の歌人に詠ぜられた頃には、あの傳説は既にあれだけの略筆を許すまでに、當

時の人々には知れ渡つて居たのであるが、しかもその原形であり元であつたかとも思ふ簡
單なる口碑は、今でも數限りも無く國々の低地に、歌にもならずはまだ流布して居るので
ある。さうして傳説の流布と、その發生とは又二つのものであつた。單に記録に保存せら
れて居るといふことが、少しでもその傳説の先行を證明するもので無いことは、比較によ
つて段々に之を知ることが出来る。記録はたゞ自分の時代よりも前に、既にその一つの口
碑があつたといふことを語るだけで、少しでも他の口碑の古さを極める力は持つて居ない。
さうして實際に又澤山の古く粗野なる民間傳承が、丸々記録の干渉を受けぬ自由なる生活
を、つい近頃まではして居たのである。地方の文學の新たなる興隆と、旅を楽しむ人々の
親切とが、必ず或一定の條件の下に歓迎せられねばならぬのは其結果である。もし幸ひに
して其條件が充されてあるならば、『山の傳説』は何よりも大なる學問への貢獻であり、さ
うでなかつたならばたゞの讀物の一つの追加に止まる。故に私は先づ其差別を明かにする
必要を感じるのである。

三

山國が傳説の採集地として、特に大切なる理由は三つ以上ある。其一つは山に限り、山中の人の集團で無ければ、發生し得なかつた傳説が必ずあつたこと。是は交通が平野に偏して居た結果、恐らくは今まで比較的省みる者が少なく、従うて高山植物のやうな懐かしさが今もあるので、どれが山地の特産であるかといふことは、固より一通りの平野の知識を持つ人のみが、靜かに觀察した上で知れることであるから、其樂しみは一段と奥深いものである。それが人間の定住のおくれて始まつたといふことから、假に新しい發生だと推定せられるにしても、寧ろ其種となつた何物かの、久しい發芽力の保存に驚歎すべき場合が多いことと思ふ。第二には雲より下に在る都邑の傳説が、流布して山に入つて如何なる形を取り、この特殊の還境と相觸れて、果して如何様の調節を遂げたかといふことが、山

に來て見なければ知る由の無いことである。低地の傳説は縁起により、又は切れ／＼の歴史の知識により、更に進んでは各時代の好尚や迷信によつて、屢々原形の尋ね難いまでに、切り繼ぎ捻ぢ曲げ水や砂糖を交へ加へられてある間に、山には格別の文學の要求も無くて、あれば有るなりに元々信じた様に、其儘傳はつて居た場合の多いこと、是が即ち第三の理由であつた。細かく考へて行くと其他にも、まだ幾つかの特色は擧げ得られる。たとへば山の人の一様に寡黙で、話術の拙劣を自識して居ることも、問へば答へるといふ程度に山の話を簡明にして居る。土地を著名にし掛茶屋を繁昌せしめようといふ計量が、底に潜んで居なかつたのは勿論、單に聽く人の眼の色を讀んで、もつと面白がらせようといふ當座の野心すらも、此方には常に缺けて居たのである。正直な記録ならば此特徴は、恐らく讀む人の胸にも到達せずには居なかつたらうと思ふ。

四

そこで最後になほ一つの、新たなる要件が認められなければならぬのである。低地の傳説には、語る者の種類によつて、効果の差等といふものがさう顯著には現れないが、『山の傳説』は最終に之を傳へた者が文士であり、讀書家であり、乃至谷底に住む當の本人であることによつて、幾通りにも味が變るばかりか、時としては正味が稀薄にもなり、又逸散することすらも想像し難くない。短く切れ／＼に又口不調法に残つたものゝ中から、我々の知識の饗宴に取入れる材料は、殊に珍重して之を輸送する必要があつたのである。同じ山中の住民といふ中にも、下に降ることを職業とする者と、嶺に往來して生計の道を立てて居る者とは、近代は一層二色の趣味が對立しようとする姿が見える。誰から聽いても山の話は一つといふことが、今は殆ど成立たなくなつて居るのである。それだから山と漁

村とに於ては、どんな人が話したかゞ一段と重要になり、又如何なる時と場合に、其話が持出されたかも、同じく附記して置く必要を生するのである。私は最近に此一文を草する爲に、思ひ出して本棚の隅から、六年前に買つて來てあつた、セルソールといふ人の『西部アルプスの口碑集』を出して讀んで見た。瑞西のヴォーといふ州の村民の昔語りを、土地の僧侶かと思ふ人の集めたものである。私は久しい間かの山地を旅行して、書中の村の名などは殆ど皆知つて居るが、悲しいかなそれは電車や自動車の中から見たゞけで、しかもこの話は大部分土地の方言で話されて居るものであつた。斯ういふ驚きと歎息とは、まだ我國の内でも屢々くり返さねばならぬことゝ思ふ。本物のアルプスでは人も知る如く、山の上遙かに、大いなる夏の小屋があつて、村の男子の大多數は牧牛の群を連れて、年の半分はそこに行つて泊るのである。後には少しづゝの耕作が其周圍に行はれ、淋しい小さな部落が出来て居る處もある。天然の威壓が殊に烈しい爲に、平地で得られない一人一人の實際も多く、それを又生涯牢記して、聽かれたら語らうとする老人が少なくなかつた。口碑

は數百年の間、かゝる人々によつて保管せられ、シヤレエ(山舎)は即ち又其交換所であつた。日本の農民はいづれの民族よりも、殊に群住を愛する傾きがあつたやうであるが、それでも猶奥山家には此類の孤獨があり、又別に獵人などの隣を欲せざる一つ家の生活があつた。それが悉く現代の交通革命に由つて、急速に消え去らんとして居ることは、アルプスの酪農國よりも更に甚だしいものがある。『山の傳説』の新たなる喜悅を知つた者は、すぐに急いでこの失はれ行くものを取留めなければならぬ。それには又この著者の採集法に對して、或は稍嚴峻に過ぎたる批判を下す必要もあるかと思ふ。私の現在興味を感じて居る問題は、山の一つの脅威たる山人の存在と、里で夙より説話化した巨神譚とが、境も紛はしく混亂しようとして居ることである。サヴォアやスイスに於てガルガンチュアと謂つて居る大人も、やはりこの二種新舊の經驗が、誤まつて同じ起原の如く語られて居るものゝやうであるが、大きいと謂つても大きさが實は非常に違つて居た。それから今一つは黄金の雞、山で夜中に時を告げる聲を聴くといふ話も、亦本家のアルプスの方にあつては、

明かに雞を生きながら山に埋める信仰が原因のやうに言つて居る。日本では今は里中の塚城址にも流布して居るが、是などは本來多分は山の傳説であつたといへる。さうして國を隔てたこの一致が見出さるゝ以上は、假に發生は人が住むやうになつて後であらうとも、種は潜んで遠き我々の神世からあつたのである。傳説の他の多くの昔話と異なる點は、それが少なくとも或昔に、確かに有つた事として信ぜられて居たことである。さうしてその最も信じ難きものから、次々に之を遠い神世に押送つて居たことである。一度はあつた事であるが故に、理由があり又法則があり、更に又計畫があつたと考へられたことである。

神世よりかくなるらし、古へもしかなれこそ

うつせみも妻を争ふらしき

斯ういふ風に我々は嗟歎して、その有り得べからざるものを聴かうとしたのであつた。今日我々の知りたいと思ふのは、傳説そのものゝ珍らしさでは無い。傳説はほんの僅かばかり諸國の例を見て行けば、直ぐに人はその型の一致し一定して、特に例外の少ないことを

見出すのである。それを我々の如く貪つてなほ集めて見ようとするのは、多くの比較によつて始めて「之に對した古人の心」がわかるからである。故にさういふ資料として精確なるものを供給することが、もし採集の目的であつたならば、それこそ多々益々辦すである。青木君の『山の傳説』が大に人に讀まれ、此上にも更に數篇を重ね行かんことは、自分は大に此條件の下に歓迎するのである。

(昭和五年六月二十八日箱根小涌谷に於て)

佐々木喜善著『奥州の座敷ワラシ』

紀州高野山の舊記の中に、座敷稚子の事が見えぬと云ふのは、多分二人の紀州人の言は

れた通りであらう。しかも私が書物には無くても、實際有つた事かも知れぬと言つたのは、あの大阪の雜誌に出たと云ふ話が、之を信じて報告した人の話らしかつた爲ばかりではない。私は未だ「新社會」を讀んでは居ないのである。

東京にも百年ほど昔、一種のクラブコが住んで居た例がある。家の人に多少は世間へ隠す心持もあつたので、存外に夙く忘れてしまはれ、又は他の不思議と混合せられたのが多いことであらう。本所二丁目の、相生町と緑町との横町であつた。梅原宗得と云ふ人の家の古い土藏に、妖怪とは謂つても、別に何か害をした話の無い妖怪が居た。色々の形で現れたと謂ふ。此土藏に入つて働く者、俄に大小便を催すときは、即此物の出ようとする前兆として、急いで飛出したと云ふことである。

夜は鐵棒を曳く音がした。金剛三昧院の小僧と同じく、是も火防の神として祀られ、此家から火災除の守札を出し、其靈驗を認められて居た。祭の日はどう云ふ譯か、四月の十四日であつた。燈明菓食音楽等を以て厚く祀つたとある。ともかくも唯の神様では無かつ

た。或年近火が有つて、此家も片付が間に合はなかつた時に、見馴れぬ女が一人出て来て、荷物を纏めて庫へ入れてくれる。髪長く垂れて、顔は如何しても見えなかつた。やがて其庫の中に自分も入つて内から戸を閉ぢたと云ふことである。江戸では是よりもずつと小さい奇瑞が有つても、直に守札を受けに来る者があつたから、祀るといふのは此爲であつたかも知れぬ。古土藏は石庫で、中には何の變つた事も無かつた。唯隅の棚の上に五六寸四方の箱が一つあつて、昔から置處を換へず、又手を着ける人も無かつた。是が不思議の源であらうかと云ふことであつた。此話は十方庵の『遊歴雜記』第二編に出て居る。其梅原家と古土藏とは今どう爲つて居るか。或はやつぱり焼けてしまつたかも知れぬ。

ザシキワラシの話が、私の此本と一緒に出す田原藤太の話の心得童子と、若干の關係が有るらしいのは、偶然ながら面白いことである。佛教の方で護法と謂ひ、又は天童とも使者とも言ふのは、本來其宗教の大な力を以て招き寄せたものだから、人と云つても精々名僧の處へ來る迄であるが、我々の心得童子は在家にも來て仕へる。さうして其家を長者に

せざれば止まぬやうである。其中には至つてザシキワラシと近い者もある。出羽の鯉川と云ふ處に住む貧乏な夫婦、或時からふと此類の者の、援助を受けるやうになつた。寶曆七年の事であると言ふ。妾は決して見せた事は無いが、何處からとも無く人の聲で物を言ふ。後には馴れて怖くも何ともなくなつた。主たる援助は夫婦の問ひに應じて、未來の事を言つてくれて、それが皆中ることであつたが、時としては食物などを、彼等の求めに従ひ、何なりともとのへて持つて來て食はせる。これと同時に近隣の家では、餅なり饅頭なり其だけの物が無くなる。人有つて其聲に由つて其物を取留めんとすれば、形は見えないが、力すこぶる強く、相撲を取り捻ぢ合ひをする體にして、曾て誰にも負けなかつたとあるが、何處までが誇張の噂であるやら分らぬ。津村正恭の『譚海』卷二に出て居る。後いつと無く其怪止むとある。

佐々木君蒐集の家の靈が、ずつと物語化した二人の娘の話などの外、豫言はおろか碌に物も言はぬらしいのは、ザシキワラシ以上の不思議である。是は後世どう説明せらるべき

ものであらうか。尤も人と神との懸隔は、概して時と共に遠くなるものであるが、出現の回数が段々と稀になり、常の事が非常の事のやうになるに至つて、何も語らずとも姿を見せるだけで、目的の全部を達したからと、考へて置いてよからうか。然らば即ち民間巫道の衰微を示すものである。

佛教の高僧が護法童子を天から呼んだと同じく、我々の巫女たちは秘法を以て各自の心得童子を作つたやうである。さうして之を旅行等に同行する便宜の爲に、體軀から引離した魂だけにして連れて居たやうである。さうすれば勿論人にも見えず、又色々の物にも宿ることが出来る。之を自在に利用して、陰から不審の事を説明させ、或は他人の身の中までも往來せしめる。たゞ一つの不便は既に不用に爲つても、元々自己の體を具へぬ靈魂であれば、他には行き所が無い。其故にいつ迄も術者の家に留り住んで居る。此等が舊家に纏綿する所謂ザシキワラシと、關係あるものでは無からうか。もしさうだとすれば、是も今ちようど私が『おとら狐の話』の附録に於て、些しく説いて見ようとする問題である。

最後に今一つ、何故に座敷に住む者が多くワラシであつたかと云ふ事、是は至つて重要な點であるらしい。生きた人間の中では、老人が最も賢明にして且指導好きであることは、殊に我々の明治大正に於ける経験であるが、奇なる哉神様には若い形が多い。少なくとも童子の形に於て神意を傳へたまふことが多い、ザシキワラシも其現象の一つの場合ではあるまいか。未開時代の人の考へでは、教育や修養に因つて人柄が改良するなどは思はぬから、所謂若葉の魂の、成るべく煤けたり皺になつたりせぬ新らしいものを、特に珍重して利用したのではあるまいか。佛教でいふ輪廻の思想では、魂は虫や鳥に宿つても同じ魂で、人間に来てから別に成長することも無いとして居るのだから、一日で言へば早旦、一年で言へば正月が結構なやうに、暫らく休養して來た新らしい魂を上玉と認めて、出來るならば之を使はうとしたことが、今日に至るまで、赤兒を普通の墓地へは送らぬと云ふ風習の、源を爲して居るのでは無いか。それだとすれば他の亞細亞民族の中に、ぼつ／＼残つて居る子供を家屋等の守護者とする手段の、話をするさへ恐しい儀式など、遠い昔に於て縁

を繋いで居るのかも知れない。ザシキワランが時として火事の前觸れをすると言ひ、或は又此災を防ぐ力があると思はれたらしいのも、曾ては火を怖れた人が之を祀つた名残であつて、乃ち此怪物の由つて来る所を暗示するのかも知れぬ。何にしても、死んだ水子の取扱ひ方は、我々の父祖の變つた心持を推定する好い材料である故に、私は又別に赤子塚の話に於て、人の運と魂との、古い關係を考へて見ようと思つて居る。但し家の中に埋めると云ふ分は、まだ少しも注意して居なかつた。是は佐々木君に頼んで、今後大に調べて貰はねばならぬ。

其他オクナイサマとの隠れた關係、オシラサマと云ふ名前の起り、それからザシキワランの顔の色の赤いと云ふこと、小豆がすきだと言ふこと等、其から其へと仔細を尋ねて行くならば、今此話を只面白いと讀んで居る人たちが、漸く國民と云ふものを考へねばならぬ時分になつて、顧みて此等の書物の存外に深い意味を持つものであつたことを感じ始める頃には、ちつとは我々平民の歴史を知る手掛りにもなるであらう。ちようど今から十年

前に、私が佐々木君の話に據つて『遠野物語』を書いた時には、誰もザシキワランなどを問題にする者が居なかつた。それが現在では兎に角に一團の研究者が起つて、眼を皿のやうにして解決の鍵を捜して居る。さうして遠野は又佐々木君の力で、學問の爲の小さき一箇の高千穂峰と爲つたのである。無しと云ふ返事が來たり、又は丸々に答の來なかつた地方でも、何時かは氷の解けて水草の青い芽が見えるやうな春が、來ぬと云ふこともあるまい。どうか此書物を茫洋たる湖上の一扁舟として、是から更に處々の岸に棹さしたいものである。

佐々木君が遠く各地を旅行するの餘裕が無くて、ひたすらに猿ヶ石川の小盆地ばかりから、有る限りの舊話を搾り取るやうにせられたのは、氣の毒ではあつたが又得がたい好経験であつた。この一つの物をちつと見詰めるやうな態度は、我々普通の散漫な旅人には、到底望まれぬものであつて、又是でなくては次で起るべき蒐集者の手本とするには足らぬのである。此篇は篇者自ら奥羽民譚集の第二巻と稱して居る。然らば其是非とも第一巻と

せねばならぬ一篇は何であるか。どうか次から次へと相互に脈絡を辿つて、世に隠れたる東北文明の尊い起源を明らめ、我々の靈魂が未だ其宿を移さざる前に於て、鏡に向ふやうに此國民の、眞面目に對して見たいものである。

(大正八年十月五日)

早川孝太郎編『能美郡民謡集』

能美郡民謡集は編者の言にも見ゆる如く、採集と謂はんよりも寧ろ發見であつた。この茫漠たる大都の塵の裡に、土の香のまだ新しい數百篇の村の歌が、匿れ潜んで聴く者を求めてをらうとは、如何に熱心なる我々の同志と雖も、曾て想像する能はざりし所であつた。

従つて殆ど不思議に近い此頃の遭遇を、再び今後に期待することは無理かも知れぬが、少なくとも之に由つて我々の經驗し得たことは、所謂「京に田舎あり」の古い諺は、現在に於て殊に眞であつて、無限に生長して行く東京の町の一隅は、必ずしも故郷の傳統を斷ち切つて、流れ込んだ新らしい人のみを以て、構成せられては居なかつたと云ふことである。諸國さま／＼の昔風が、汽車に積まれて、此中へも大分入つて居るらしいことである。但しこれと同時に、愈々痛切に感じられるのは埋没の危険である。例へば我が早川君の如き親切なる蒐集者が夜分少しく閑あつて家に居る時節に、恰も其隣屋敷へ新たに地方から、物覚えのよい寂しい一女性が越して來て、話相手を求めて居たと云ふ如き場合は、決して屢々繰返されべき偶然では無いのである。しかも今更心付いて見ると、此類の人々とても家庭の事情があり、其他何等かの外部の促進を受けて、追々にこの混沌たる新群衆の中に入り來り、忙しい爲に以前の生活を忘れ、程無く同化せられ無視せられて、只の都人になつてしまふ例は多いので、必しも生れた村を愛し、祖先の永く思慕せられることを希ふ人なる。

が故に、強いて本居の土に踏止まり、どこまでも傳承に忠誠で居ることの、出来る世の中
ではもう無いのである。

書物が多くして良書の至つて乏しいと同じく、暗記と饒舌とは必ずしも六つかしい技藝
で無いにも拘らず、眞に忠實に我々の爲に昔を説き得る者は、思ひの外尠ないものである。
以前の田舎に於ても、此資格を具へた人は決して多くは無かつた。うつかりと暮して居て
も人間はすぐに年寄りになる。徒に眉の白く杖の藜なる者は幾らも居る。老翁なるが故に
物識りなるべしと速断するときは、往々にして思はぬ失望をすることがある。相州の佐野
川には二代がかりで、村を日本武尊御通路の遺蹟にしようとして、努力して居る老人さへある
と謂ふ。なま中僅かの歴史の學問がある爲に、我が豫断を立證し得べき材料のみの蒐集に
骨を折り、其他を故意に湮滅せしめようとする企ても、随分無かつたと言はれぬのである。
故に彼等には多分の空想があつてはならぬ。精確なる感受力と共に、其印象を或期間に運
搬する爲には、舊い事物に對する渴仰咏歎の情が、寧ろ宗教的とも言ふ位に、濃厚で無け

ればならぬ。要するに最も見聞に忠であつて、單に我が趣味常識を以て判別取捨を敢てせ
ぬのみならず、見た以上聴いた以上は之を何人かに語らずには置かれぬと言ふだけの、
素直な心持が必要である。近代人の社會に於ては、それは如何にも六つかしい注文のやう
に見えるが、尠なくなつたと云ふばかりで、今でも其型の人は慥かに居る。古風な國の色
色の制度が、著しい變更無しに永く續いて居るのを見ても分るが、もとは此の如き態度を
以て公道徳の理想とした時代があつたので、世中が斯うなると其様な人を見出すことが、
次第に困難になるといふ迄である。リバース博士の如きは、此類の説話者を呼ぶに "The
old man" の名を以てせんと主張した。國語に譯して見れば、やはり「故老」と謂ふ外は
あるまい。さうして早川孝太郎君自身は、年がまだ若いから氣の毒ながら、正しく一人の
「故老」であつたことは、『おとら狐の話』『三州横山話』が之を證據立てゝ居る。そこへ
もつて來て徳は孤ならず、明治初年のざんざり文明の空氣に生れた一婦人が、純眞なる第
二の故老となつて出現したといふことは、單に稀有なる邂逅として珍重すべきのみならず、

我徒に取つては如何にも心強い新発見と言はねばならぬ。

集中二三の長篇の中に、空行を存せねばならんだ記憶の脱落は、惜しいとは言ふものの却つて説話者の人柄を床しくする。歌の章句には、手筒な語法や言ひ廻しが少なからずあるけれども、それは聊かも最後の歌ひ手が作爲を加へたものでは無くて、ともかくも會て或時或地方に於て、多數の老若男女が一同に、斯う聞いたものであることが、之に由つて始めて信ぜられるのである。さうすると引續いて起るべき問題は、作者は何人か云ふことである。作者に何様の力があつて、此の如き文句をはやらせたと云ふ以上に、永く忠實に遵守させ得たかと云ふ疑ひである。近わたりの村の名、家の名を題材とした短篇は別にして、クドキと云ふ類の踊歌などは明白に遠い旅をして居る。例へばお杉が寺に詣でて和尙を挑む物語の如きは、四十年前にたしかに自分の郷里、播州中部の農村の盆踊に、最も人望を博した一曲であつたが、自分の記憶する限り筋は同じで、文句は丸で異なつて居る。お夏清十郎の變化かと思はれる一篇の如きも、何れの一節にも京大阪の地に始まつたらし

い句法が見えぬ。即ち多くの地方に行はるゝものを歌ひ比べて見たら、恐らくは曲節の相違からも容易に發見し得べき如く、邊卑の田舎へ持運ばれたのは、ほんの要點ばかりの輕荷であつて、之を仕立てゝ新たに一篇の詞章とし、土地相應の物の哀れを語つたのは、やはり地方の無名詩人、と云ふよりも寧ろ此の如き讀人不知を出すべき、村々の空氣であつたと思ふ。従つて近代漸く盛んなる地方の流行唄の如き、假令一方で既に廢れて後に、他の一方で新たに行はれたとしても、なほこれと民謡との間には、明瞭なる一線を劃し得るうである。

奥澤瑠璃の義經記は、土地の座頭の語音を以て、武藏坊の勇猛を説いて居る。他郷の土を踏んだことも無い南部津輕のイタコたちも、豊後の滿能長者を我が歌にして、炭焼の立身を語るのみならず、更に其感動を深くせんが爲に、地方地方の靈泉の奇瑞、乃至は神佛の功德に結び附けたと見えて、之を己が村の史實と信する者が、今なほ東北だけでも數ヶ所ある。さうして不思議は里人を驚かした物語の内容よりも、寧ろ是程に自由なる土地の歌

人の技巧が、何故に踴躍として古來の型に追隨し、別に各自の空想に基づいて、新らしい趣向を立て、見ようともしなかつたかと云ふことである。察する所民謡の作者は、一個獨立の詩人と謂ふよりも、言はゞ民衆の耳であり口であつて、彼等が聽かんと欲し言はんと欲する所のものを、暗黙の間に命ぜられて歌つたゞけで、しかも民衆自身には古い昔から、實際有つた事で無ければ聽くに足らぬ、歌にする値が無いと云ふ考へが、確乎として存して居たのであらう。ところが飢饉とか戦亂とか、人生には異變が多く、歌を忘れる不幸の年が屢々あつた上に、たまには残つて居ても、古びて用ゐられないものが次第に出來て來た爲に、世が安樂になると若い者がまづ淋しがり、有る限りの郷黨の話の種を、歌に作らせて歌つて見るが、それでもなほ足らぬ分は僅かの便宜を求めて、斯うした遠方からも取寄せて見たのであらう。

此關係は或は又、海苔と亀朶との因縁を以て譬へて見ることが出來ると思ふ。我々が求むる所は香の高い紫色の植物であつて、ひゞは素より海苔の樹では無いのであるが、今も

143957

し村人が小舟を漕ぎ出して、これを我浦の沖に立てゝくれなかつたら、かの草も成長せず、目も留らぬ大海の塵と爲つて、永く我々の知識の外に浮遊してしまふかも知れぬ。しかも幸ひにして人間歌を欲するの情は、葉山繁山の樹の枝よりも繁かつたが故に、殊には歌を以て引纏めた踊りや木遣り、其他色々の共同作業の基調には、萬人に適用する力強い法則、即ち生存と戀との二人祈願が潜んで居た故に、生きて行くあはたゞしい人生の繰返しが、能く是だけの痕跡を民謡の上に遺すことを得たのである。大近松出現の更に以前から、普通の原因で死なゝかつた人の生涯は、是非とも物語にして語つてやらねばならぬと云ふ、世間からの要求があつた。しかも事實は十行か十五行の三面記事である爲に、之を一篇として咏歎するには、大阪の心中は大阪らしく、江戸の仇討は江戸らしく、大略は土地の者の豫期する如くに潤色するのが作者の役であつて、近くは明治大正の自傳派とも稱すべき文人たち迄、必しも斯うした趣向の束縛に對して、腹から反抗する者ばかりでは無いやうであるが、是が田舎であり古代である程、一層其拘束が強くなつて、結局作者は永遠の無

名氏でも、人でも神でも構はぬと云ふ所まで溯つてしまふことになるのである。

だから口寫しの文藝には、模倣剽竊の沙汰も無く、版權の問題はなほ無かつた。一回の印象は即ち一回の印行であつて、其度毎に自由なる改訂増補があり、いつも時代と共に成長して行く力があつた。外題が變り新人物が附加はつても、依然として同じ奇蹟に驚き、同じ悲歎と悦樂との間をさまようて居た故に、言はゞ一個の民族を主人公とした一篇の大戯曲を、爰に切り彼處に繼合せて、横から縦から色々にして賞翫して居たやうな感があるのである。この羨むべき藝術自由を、窮屈なる今日の割據主義に變形させ、徒らに若干の才子の名を成すの具に供したのは、やはり又文字の災禍の一つと言つてよからう。讀賣瓦版の小技巧は、最初から其力の限りあることを自覺して居つた。之に反して當世の出版事業は不朽を理想とし、天下後世の青年をして、書籍に由つてのみ所謂文學を解せしむることを期して居る。此威勢に面して滅び壞れざるものは少ないであらう。例へば蕞爾たる一卷の民謡集でも、これが出てしまへばはや三百章の村の歌は古曲と爲つて固定する。歌を好

むこと飲食よりも切に、之に頼つて心靈の孤獨を忘れてゐた優美なる一個の生存が、名畫の繪姿の夜が明けて壁に復つて行く如く、忽ち數十年來の足踏み手拍子、乃至は之に纏綿した色々の情緒、なげきほゝゑみ眼の光を以て、僅かに表現し得たやうな遠い世の記憶と、一切の縁を絶ち切つて過去と我々との間に、只平板なるスクリーンと爲つて残らねばならぬ。此結果を十分に豫期しながら、なほ我々の保存事業が、一日を空しうすることの出来ぬのは、要するに時勢である。如何ともする能はざる世中の力である。

是は意外の長談議をしてしまつたが、畢竟する所自分は此小冊子の公表に由つて、地方地方の民謡の背後に、埋もれ果てたる古い大きな文藝の、横たはつて居ることを信じ得たのである。さうして文庫の中だけの勉強が、愈々昔の人たちの心持から、我々を隔離する手段であつたことに心づき、力及ばぬ迄も出来る限り之を喚び近づけんとする。一二の篤志者の辛勞に、深い感謝を表白せんとするのである。之に附隨しての小さい發見は、今一度よく見た上で無いと、詳しく述べる事が出来ぬ。例へば早川君の分類は、何か感じの上

から斯うして見ずには居られなかつたのであらうが、現に各部の特質に就いて、適當な名稱が下し得なかつたのを見ても、是が果して常に採用すべき區分法であるか否かの疑はしいこと、多くの民謡は少しづつの変形を以て、色々の場合に轉用せられて居るらしいので、文部省の俚謡集の如く、粗摺歌草取歌など、一々に排列したのは亦失敗であつたこと、並びに歌と唱へ言との中間にあるやうな、童兒の遊戲に残つて居る文句は、やはり此本の如く附録として添へて置く他はあるまいが、手毬唄と手玉唄、鳥の唄と螢を呼ぶ詞の類は、單に文句の長短ばかりで、歌と否とを區別することも六つかしいと思ふことなどは、他日多くの讀者の説を聽いて後に、最も自然に近いものに從つて、今の疑惑を決したいと思ふ。

(大正十三年十月十二日夜)

三上永人編『東石見田唄集』

文部省の俚謡集は記念すべき好事業であつた。三十幾つの道府縣に亘つて、百餘の歌の種類を網羅し、詞章の存録せらるゝもの三千を越えてゐる。之を一見して先づ日本の民間文藝が、今もなほ甚だ豊富なることを感ずる者は多いのである。しかも此書に於て何人も未だ心付かざる一事は、その三十六頁の目次のたつた二行、即ち島根と廣島の二縣の田植歌が、量に於て全篇の約六分一を占めて居ることである。鳥取縣は俚謡集の報告に漏れて居るが、他の岡山、愛媛、山口の三縣も事情はほど似て居る。關東奥羽などの諸地方に比較して、最も著しい相異は情緒の變化である。後者の田植唄には勞を忍び飢と疲を語るも

の多く、然らざれば男女諧謔の辭を以て、快活の笑を催すを常とするに反して、中國の唄には所謂田祭の行事を讃歎したものが多かつた。是は固より信仰と風習の濃淡に關聯するものであり、更に溯つては當初の土着方法、乃至は部曲組織の同異に基づいて居るのかも知れぬが、しかも近畿の農村の如き、事情は西に近かるべくして、歌の風は却つて東に似て居るものがあるのを見ると、或は未だ究められざる何等かの原因が、曾て我々の祖先の様に抱いて居た微妙なる感情を、此には消滅せしめ彼には偶然に保存させて居たとも解し得るので、その興味ある一問題を決定する爲には、この數百の歌謠以外に、別に是ぞといふ資料はもう無いのである。

數ある民謡の中でも、田植唄には取分けて保存の困難な事情があつた。所謂農事改良の勸説せられてから、既に農夫一代の歲月を經過して居る。同じ中國でも平地部の村落に於ては、正條植の新作業法は、勢ひ早乙女の歌を不必要にし又不可能にした。それにも拘らず神の田と舊家の田に限つて、悠揚たる古風を以て之を植ゑることは、今となつては又新

たなる意思の力でなければならぬ。従つて此種の田唄がなほ民謡として行はれて居ることは、實は我々の安じて期待し能はざる所であつた。然るに『東石見田唄集』の新たに世に出るに及んで、始めて其悲觀の無益に近かつたことを、發見することを得たのである。少なくとも石州の東南隅、安藝と備後の境の山に接した、邑智郡口羽村の一盆地に於ては、現に大正十五年の今日に至る迄、なほ此田唄の大部分が、尋常の田人に由つて歌はれて居ることが、歴然として立證せられたのである。中國山脈の諸處の谷合には、事情の同一なる村が勿論まだ多いのであらうが、熱心なる採録者を缺く場合には、學問に取つては其消滅の遲速は問題で無い。乃ち編者三上君の辛勞を多とし、永くその郷里の名に繋けて、希有の遭遇を記念せんとする所以である。

口羽は江ノ川の一支流、出羽川の岸に臨んだ面積二平方里餘の一村である。家の數は約六百、十六の小部落に分れて居る。村の口碑に依れば山城の京の始め頃に、今の氏神様宮尾八幡宮の御伴をして、三上與七太夫といふ人が近江國から下り、下口羽の根布といふ處

に來て住んだ。其子孫の連綿として此土の穀を食み、春秋の神を迎へ送り、時鳥の啼く月となる毎に、眷族打群れて田に立ち苗を採つたのが、やがては此集の編者をして今日あらしめた因縁である。たとへば多くの田唄が當初野を越え谷に沿ひ、次々に渡つて來たものであつて、此家の祖先は聊かも其製作に携はらなかつたにしても、此一筋の血の流れこそは、永い年代に亘つて最も數多く、清く朗かなる歌の節に由つて、さざら浪だつたる流れであつた。三上君が少年にして都府に遊學し、還る日は極めて稀にして、未だ曾て其袂を泥にし、白き手を山田の濫に染めなかつたらしいにも拘らず、なほ久しい勞苦を積んで手帳の富を貯へ、更に故老に問ひ新古の寫本に對照して、記載の正確を期した上に、自身も亦田植唄の名人として同學の友を驚かし得たのは、勿論單なる古詞愛惜の情ばかりからでは無かつた。

雜誌『民族』の讀者は或は記憶せらるゝかと思ふが、最近我々の愉快なる發見は、此集中の至つて古風なる十數章の歌詞が、現在なほ用ゐられて居るといふことであつた。口羽小

學校の上級生の書いたものに、彼等が必ず耳で學んだらうと思ふ田植唄が出て居るが、それは悉く田の神の神話とも名づくべき、奇異且つ重要な諸篇のみであつた。當世の教育乃至は體驗と、併立を望み難き此類の傳承が、今まで斯うして保存せられたのは寧ろ意外と名づけてもよい。故に少なくとも我々の同志者のみは、之を過去記録の高い本棚に上げる前に、如何にして此様な信仰が歌となり儀式と爲つて、中國農村の一部に永く行はるゝに至つたかを、考へて置く必要がある。俚謡集の各地の實例を比較して見ると、根本には固より一貫した感情は流れて居るが、表出の方法には着千の異同がある。例へば田の神降しと稱する朝の間の歌でも、甲に在つては之を直接に田の神の御出と歌ひ、乙では「たあらひ」と謂ひ、丙では「さんばい様」と呼掛けて居る他に、或は又神の使ひ女たる「おなり人」おなり衆」を以て、之を表さうとして居る處もあるのである。従つて統一した信仰の原の形を知らうとするには、此篇の如く一定の部落を中心として、それから動いて出る次々の波紋を觀なければならぬ。此目的に向つては俚謡集の蒐集は、幾分か廣汎に失してゐた。其

上に若干の脱落を免れず、又個々の詞章に本来の時と順位があつて、田人の新意を以て變更し得なかつたことも、まだ十分に認められて居なかつたのである。それを整頓して始めて完全なる一機の織物の如くしたことは、先づ感謝せらるべき此集の功績であると思ふ。

(大正十五年七月)

澤田四郎作編『ふるさと』

此本の初に何か書くやうにと望まれて、ふと私は母子草のことを思ひ出した。私たちの在所では、此草の名はホーコとばかり謂つて居て、それが『文徳實録』にも出てゐるといふ母子草のことであらうとは、大きくなるまで知らなかつた。十三四年前に『赤子塚の話』

を書いて見ようとして、始めて攝州有馬郡母子村の舊傳に、通幻禪師が未生以前の母を慕ひ、此草を摘んで三月節供の餅を製したといふ、物語のあることを知つて哀れを催した。私の子供の頃には、草餅は蓬を入れるのがもう普通になつて居て、ホーコを用ゐる家は至つて少なかつた。最初は餅の緑色を鮮かにする爲に、次には蓬の高い香氣を愛して、民間の趣味も次第に今の風に移つたのださうである。

それにも拘らず、幼ない者は、籠を持つて野に出ると、やはり昔風に此草も摘んで來た。うちでは用はないのにと母に言はれて、失望して棄てたことなども私は記憶してゐる。土手の葎や雀の毛鎗に交つて、ホーコの黄色な花がつましましやかに咲いて居るのを見るたびに、今でも折々はこの草が人間と縁の薄くなつたことを、氣の毒に思ふやうな初春の草であつた。記録や木名をまるで知らぬ者でも、實際摘んで行きたくなるやうな初春の草であつた。蓬の若葉も美しい色であるが、此方はもう一層子供たちの眼につき易い姿形をして居る。多分は大昔もさういふことから、是が食用になり始めたのであらう。さうして我々がいつ

迄も之を摘んで居たのも、隠れたる意欲の遺傳であらう。

採集の用無用といふことは、屢々我々の學問に於ても考へられる。澤田四郎作君は自分の知る限りに於ては、多くの外國の珍書を貪り讀み、既に新知識の滋味を満喫した人である上に、自身も亦料理の才能があつて、我々に向つて幾多の香氣高く、色鮮明なる心の食品を供與して居る人だ。其人が再び故郷の田園に遊んで、斯ういふ昔ながらの野の草を籠に摘み、殆どそれが何にして食ふものかを考へもせぬやうな顔をして戻つて來られたことは、矛盾であつたにしても誠になつかしい矛盾である。私には是も一種の母子草の魅力と名づけてもよいやうに感じられる。芹や嫁菜や土筆なども同じことで、如何に色々の珍しい西洋蔬菜が作られるやうになつても、季節が來る毎に此味を思ひ出さずには居られない。それは故郷と先祖との大きな記録といふ以上に、更に又我々の無邪氣であつた日の、僅かに残つた記念でもあつたからである。之を忘れて通り過ぎるやうでは、人生は餘りにも寂寞なものだと言はなければならぬ。

澤田君の母堂には御目にかゝつたことは無いが、生んで育て、教へられた末の子が、我が澤田君であることによつて、十分に其風格を想望することが出来る。獨り一卷の書に集められた前代の事實だけで無く、この常人生活に對する理解と愛着、殊に何物をも輕微とせず、必ず精確に之を語り繼がうとする態度までを、我子に傳へて置くことが出来たといふのは、女性の事業としては完成と言つてもよい。實は私も非常に物覚えのよい親切な母をもつて居たが、亡くなつてからもう三十五年にもなる。さうして澤田君のやうに、ぢつとして話を聽いて居る時が誠に少なかつた。親の愛と學問の喜びとを、一緒に味はふことの出来る者は、さう澤山には此世には居ないのであつた。此本を世に遺さうとする編者の心境は別として、とにかくには澤田君の、稀有の幸福を記念するの書である。

(昭和六年一月)

伊能嘉矩著『遠野方言誌』

伊能先生を深く追慕する人々が、今度先生の名を記念する爲に、地方研究の小團體を作り、此初秋の一週忌に先だつて、發會式を挙げようとして居る。先生の遺業を後代に傳ふる方法としては、是に優るものは他に有るまいと思ふ。諸君の知る如く、先生は東奥遠野のみの恩人では無かつた。日本一國の學者の態度を以て其郷土を研究し、又其郷土愛に立脚して、弘く内外の事相を學ばれた。假令學問は奥遠く、人の生涯はよし短くとも、其志は永く諸君の間に活き且つ成長することであらう。

『遠野方言誌』は實は未完の遺稿である。謙抑なる伊能氏は、必ず若干の増訂を加へた後で無ければ、是が公刊を容されなかつたことと思ふ。しかも先生はもう既に之を拒み得ぬ人となられた。悲しむべき記念である。

『爐邊叢書』の編者は、懇切に故友諸君に希望する。願はくは屢々此書を翻へし、獨り之に由つて伊能氏を思慕し憶念するのみならず、更に新たなる見聞と發明とを、此書の餘白に注記して、行く／＼は最も完全なる遠野地方の文化研究を以て、現時甚だ振はざる我邦の言語學に、貢獻することを力めたまへ。是やがてこの篤學なる先輩の名を、不朽に傳ふべき所以である。

(大正十五年六月)

荒垣秀雄著『北飛驒の方言』

飛驒の方言は、享保年中に初稿成ると傳へてゐる『飛驒志』が、先づ之に注意して居る。明治に入つてから、各郡の教育會はその志を受継ぎ、既に數種の調査書を公けにしてゐる。自分の見たものでは、『大野郡の方言調査書』『益田郡志』『吉城郡袖川村誌』がある。「飛驒史壇」にも若干の方言採集があり、又梶田誠君の如き年頃方言の調査に精進してゐる人も少なくないといふことを聞いてゐる。しかし荒垣彦兵衛氏の遺稿の存在するといふことだけは、近年朝日新聞社に入つて、令息の秀雄君と机を並べるまではまるで知らなかつた。前年の旅行の際にも會つた事がなく、又自分が飛驒に持つてゐる多くの友人もこれを語ら

なかつた。ところが丁度我々が言語誌叢刊の仕事に着手した際に、偶々秀雄君が亡父の事業を完成しようといふ孝行な志を立てたことは、何か因縁のあることのやうな感じさへ起る。自分の知つてゐる限りに於ては、小荒垣君は斷じて暇人ではない。幾多の同僚の中でも特に敏活に飛廻つてゐる所謂少壯記者である。それが一言も私から勧めたのではなくて、この辛氣臭い事業を新たに企て、數量に於て遺稿の約三分の一を増補したといふことは、私にとつて深い感動であつた。かういふ事業こそ、少しでも早く繼いで起るものを誘導したいものである。いふまでもないことであるが、方言の蒐集が既にあるといふことは、少しでも第二の熱心な事業を不必要にするものではない。殊にこの小さな山國では、位山の分水嶺により南北に著しい言語現象を異にしてゐるのみならず、下流には越中との交渉が非常に錯雜で、時には耳を信じ得ないやうな珍らしい言語現象が残つてゐる。その理由は至つて單純である。富山縣の海沿ひの平原は、内外の旅人によつて東西に踏破せられ、非常に多くの新らしいものを遠方から運んでゐるにもかゝらず、その山間部には以前か

らの古い生活を湛へて、川上なる飛驒の國の一部と共有してゐたのである。我々の如き間接に書冊から言語の資料を得てゐる者は、かういふ地方に臨むと常に大きな疑惑を持つ。さうして出来ることならば、三つでも四つでも全然關係の無い人たちの採集を比べて見る必要を感じる。その意味に於て荒垣父子の方言集が、その一つ／＼を自分の耳から採集してをつたといふことは、大いなる價值のあることである。それにつけても久しい間知聞を世上に求めず、ひたすらその學問の志を血脈の間に傳へようとした、荒垣彦兵衛氏の人柄を床しく思ふ。

(昭和六年十月)

大田榮太郎編『滋賀縣方言集』

明治三十年の十月に、東京帝國大學文科大學では滋賀縣廳に方言の調査を依頼した。藤岡・新村・保科の諸氏の卒業の前の話で、それには坪井九馬三氏が關與してゐる。他の諸縣に向つても同様の交渉があつたらしいが、その結果は今わかつてゐない。滋賀縣の方では、この希望に應じて各郡に命じ、新たに蒐集せしめた報告書が偶然にも今日まで残つてゐた。現在の所有者は朝日新聞の同僚中神利人君である。中神君は新聞資料の蒐集家だが、故郷のことゝは云ひながら、こんな問題にまで注意が及んでゐようとは思はなかつた。自分は何とかして之を世の中に傳へておきたいといふ希望をもらした時、君は快く原書を自

分の自由處分に委ねられた。がよく見ると各郡の蒐集に可なりの重複があり、原形のまゝでは何分にも公表することが出来ない。それで當時地方の方言を各縣別に分けて見ようとしてゐた大田榮太郎君に話したところ、この縣はまだ手をつけて居らぬとのことだつたので、その整理を引うけてもらつた。全體に滋賀縣は言語誌上重要な地域であるにもかゝらず、これまで一向に調査の成績が進んでゐない。であるからこの機會に、もう少し廣く斷片的材料をも集め、追加として附加へては如何と自分が云つて見たが、それも大田君は即座に同意して、面倒を厭はず各村役場小學校等に方言調査の状況を聞かせたのだつた。しかし報告に接したのは極めて僅少で、計畫通りこの蒐集に追加することが出来たのは、僅かに『油日郷土誌』、『堅田調査書』、『余呉報告書』等の數箇所のみである。これまでに自分の知つてゐる滋賀縣の方言集は、曾て拓殖大學内の滋賀縣人會が、謄寫版にして二回程僅かばかりの地方語を集めて出したものと、大津の高等女學校が、生徒の訛語を矯正するために、小冊子を活版にしたものとの二つに過ぎなかつた。その以外には四十年前の「人

類學雜誌」に二度ほどと、「風俗畫報」に一兩度、旅人が町の宿屋でも拾つて來たやうな粗末な報告があつたゞけである。大田君は無論それらをも見逃さなかつたのみならず、更に『甲賀郡史』と『滋賀縣地方々言集』との二つの資料をも發見し、なほ静岡縣警察部で作つた『全國方言集』、『樹木方言集』や『狩獵鳥類方言集』の中から、近江に關するものを抜出すことを忘れなかつた。この骨折は深く感謝しなければならぬ。

しかしその結果として、愈々もつてこの編輯物の本質が複雑になり、實地に就いて採訪した正確な記録の出来るまでの、間に合せといふほどのものになつてしまつた。我々がぶつかつた一番大きな問題は、採集時期の三四十年間の喰違ひ以上に、表記法の各地区々になつてゐることである。本篇の中堅をなしてゐる明治三十年より三十一年に至る各郡の調査は、當時のこと故大體歴史假名遣で、正確に當時の音韻状態を知ることが出来ない。多分かうであつたらうといふ想像までは出来るが、さりとてそれに基づいて今更改めることは無論危険である。それで不統一は覺悟の上で、各資料の出所を明記して全部原本のまゝ

寫し出すことにした。この點が甚だ自分たちの本意に反するところである。近江の郷土研究者たちはどうか之に向つて慎重なる批評非難を加へると共に、一方ではこれを喜帳とし、もう一度實地に就いて同じ語の今も存するや否やを検し、同時に最近の知識に基づいて、表記法を統一して貰ひたいものである。さうして縣外の熱心家が餘計な手出をしたことは、深く咎められないやう切望する次第である。

我々は一般に地方語の消滅に先だち、これを記録して後代に残すことを願つてゐるが、その中でも滋賀縣は殊に自然の經過を坐視することの出來ぬ重要性を持つてゐる。近江は一縣が一國で、全國中でも小さい方の行政區域に屬し、且つ交通が非常に發達してゐるから、言語の状態はその一部一端を以て類推することが出来るやうに想像せられてゐるかも知れぬが、事實はこれと正反對である。以前私は玉蜀黍の地方名を調べようとする際に、この現實に接して愕然と驚いたことだが、國境に大小四十二の通路を持つてゐるためか、中間に巨大な水面をひかへてゐるためか、とにかくに單に湖北湖南といはず、東も西も隅

隅まで、それぞれ各隣縣の影響を受けて居る。玉蜀黍でいふならば、西からは近畿のナンバが來て、東海道及び中仙道を傳つてやゝ進行してゐるのに、美濃に接した方面は尾張平野のコウライを用ゐてゐるし、北には北國と共通にハチボクといふ言葉が入つてゐる。ひとりこの一語のみならず、他の形容詞動詞にも、語法にも音韻にも、同じ對立狀勢の頗る著しいものがあるやに思はれる。かく見て來ると、この狭い縣内の何處かに必ず交叉地點、私たちの邊疆現象と謂ふものがある筈である。これが國語の成長の法則を示すために、非常に重要な材料となることは既に一般に認められてゐる。従つて近江人は單に父祖の生活が如何やうであつたかを、是から窺ひ得るといふにとゞまらず、更に第二の重要な本務、即ち日本語の新たなる検討に對して、豊富な資料を示すべき役割にはまつてゐるのである。それを今日の如き亂雑な状態に放置して、偶々他郷の者に不完全な編輯をするやうな必要に迫らしめたといふことは、心ある者の悲しみとすべきところである。この意味に於て、私は大田君の如き、全國の方言の比較を自身の事業とする、若き學徒の出現を喜び迎へる

と共に、一個近江人たる中神利人君が、三十年の久しきに亘つて、この貴重なる文献を保存してをられた勞力に感謝しなければならぬと思ふ。

(昭和六年十月)

桂又三郎著『岡山動植物方言圖譜』

今までもいゝ加減忙しかつた桂君に、斯んな骨折な仕事を勧めたのは私であつた故に、此書の門出には一言を餞すべき義理がある。桂君は都市に住し文筆に長じ、しかも「中國民俗研究」の最も熱心なる鼓吹者である所から、どうかすると不利の臆測を受けさうな人である。人には一生懸命に材料を拾はせて置きながら、自分はたゞそれを紹介し又利用する

ことによつて、名を成し業を安くする下心でもあるかの如く、疑はれるかも知れないやな地位に居る。實際其通りの人も世間には有るのだから、爰では何としても倍だけ働いて、決してさうでは無かつたことを反證する必要を、自分でもとくに感じて居るのである。それには此方言圖譜の如き採集事業が、最も適切な手段であつたことは確かだが、或は適切以上では無かつたかと私は慮れる。どうか健康を破らぬ程度に、やゝ氣永に完成に向つて進んで貰ひたい。

採集といふ語は、今日は少し濫用せられて居る。徒らに分量を貪つて整理を怠り、もしくは珍奇を専らとして脱漏を意としないなどは、それでもまだ自ら働くのだからよい方が、中には又聞きそこなひや誇張を、平氣で振りまはして採集と思つて居る者さへ有る。我々の今求めて居る民俗の知識は、その直接の保管者は大抵は常人であつた。彼等は動植物の羅列名などは知らぬのみか、それが學者の日本語で何と謂ひ、又何と教科書に書いてあるものと同じいかを少しも心得ずに、自分の知識だけを牢く記憶して居る。だから一人

で双方の言語に通じた者が行き合さぬ限りは、ゴリやドンコの問題は永遠に繰返されなければならぬのであつた。最も的確なる方法は實物を持ちあるくこと、それが不可能ならば寫生が第二の手段であつた。量は少なくとも是まで進めば安全で、乃ち信頼度の區々なる雜駁なる集積と、優に其効果を拮抗することが出来るのである。佐藤清明君が常に其報告を豫報と言はれるのも其意味で、豫報はたゞ分布を暗示し、次の確認の再調査を、誘導するものに過ぎなかつたのである。之に比べるとこの採集の如きは、事微少なりと雖亦一つの結論であつた。是が將來の綜合を基礎づけるは素より、更に一步を進めて他の多くの無形文化禁忌と謂ひ俗信といふ類の寫生し難き民俗資料に於ても、何等か之に代るべき採集の方法あるべきことを類推せしめ、結局は所謂「物と言葉と」の分割隔離すべからざるものが、今まで分割隔離せられて居た弊風に心付かせ、新たに第二のより重要な立場から、もう一度國語現象の見直しをする心掛を、普く國內の有識階級に植付けることにもなると思ふ。さうすれば桂君の辛勞も、誠に張合ひの有るものと言ふことが出来るのである。

この瀬戸内海の美しい潮の中には、單に我々の産湯の水が流れ込んで居るといふ以上に、遠く數十年の大昔以來、是が日本へ入つて來たすべてのものゝ、殆どたゞ一つの大通りであつた。廣い平原ならば一方に吹寄せられるだけの文化が、海であるが爲に一つ一つの小島、處々の岬の陰に、時々形を以て漂ひ付いて隠れて居る。人の生活にも亦色々の様式が、目近く岸を對して變化の多い比較を提供して居る。その僅かな片端を手にして仔細に看るといふことが、決して地方の學問で無かつたことは、「中國民俗研究」が程無く之を立證することと思ふ。採集者の用意としては大きな志と、微細を粗末にせぬだけの親切とを、兼ね備へて居る必要があつた。それから今一つには外來者の好意と、永く住まうとする者の功を立てたい願ひ、是も我桂君は偶然に併せ有るのである。どうか此書物が弘く恩澤を世に與へて、人と土地との因縁をいつ迄も記念し得るやうにして見たい。さうすればこの絶大の勞苦にも悔が無く、之を勧めた私も責が軽いわけだ。

(昭和七年三月)

早川孝太郎著『花 祭』

早川君のこの書物には、題目の新奇と捜査の周到、観測の精確と記述の丁寧、其他推賞せられてよい多くの特徴を具へて居るやうだが、取分けて自分として懐かしく思ふことは全篇がたとへば一本の太木の如く、さながら一つの研究の成長過程を示して居ることである。さうして又永い將來に向つて、更に此上にも大きくなつて行かうといふ勢ひを含んで居ることである。我々の仲間のたつた一つの約束は、當世風の語を假りて言へば、學問の日録化であつた。今までに獲たものは惜み無く之を人に與へ、自他共に與にそれを足場に踏んで、もう一つ前へ進んで行かうといふに在つた。其方法は往々にして心無き者を速断

に誘ひ、又は自分の見損ひを暴露するの憂ひを伴ふが、奈何せん開けた國々の民間傳承は、斯うして片端から公表して行く以外に、其保存の道は無いのである。獨り三河の花祭のみと言はず、古い慣習と其背後に潜んで居る心意の動きとは、それを究めようとする學問の進歩と、反比例以上の速度を以て消えて行くのである。それ故に私は既に何度と無く、もういゝ加減にして一旦纏めて置くことを、早川君に向つても勸説したのであつた。此書の刊行は自分たちの希望より遙かに時おくれたけれども、兎に角に是だけ豊富なる資料が、その未だ亡失消散せざるに先だつて、能く一卷の書冊に結集せられたのは大幸であつた。是にまだ何等の結論の附いて居ないことは、寧ろ我々の本意とする所である。自分は何人よりも切實に、この採集者の深き用意に感謝し、且つ早川君志す所の學問の前途の爲、改めて多くの期待を抱き得るに至つたことを欣ぶ者である。

そこで純良なる花祭ファンの一人として、此機會に少しばかり外側から、此研究題目の成長して來た順序を述べて見たい。二十一年ほど前に、自分は中世日本の民間信仰が、西

の島の一隅から起つて、徐々に全土を席卷したことが、何度か有つたらしきことを考へて、小さな書翰集のやうなものを公にしたことがある。今見るとそれは誠に下らぬことを騒いだものであつたが、其中の一例として、設樂神が鎮西より上つて洛に入りたまふといふ、百鍊抄其他の記事を擧げて置いた。設樂の漢字の由つて來る所は別として、シダラは兎に角に踊の拍子を意味する、日本語であらうと思つて居た。田樂のステイヤ、坊主踊のステテコとも關係があるかも知らぬが、今でも踊子の手に執る割竹のササラを、土地によつてシタラともサウラともいふのは、確かに元は一つであつて、従うて河内の讚良郡、筑前の早良郡などの地名も、基づく所は此伎藝に携はる者の居住であつたのであらうと思つて居た。我々の祖先の漢字採用には、折々隠れたる一種の選擇が働いて居る。どんな文字を宛てゝも、シダラといふ日本語音は表はし得るが、特に少しでも縁のある設樂の二字を採つたのは故意であつたらしい。それ故に三河北境の廣漠たる山村が、夙く設樂の名を呼ばれて居たことを、偶然の如く看過することが出来なかつたのである。

ところが此早川孝太郎君は、南設樂郡の人であつた。屢々私の家に往來して山中人の生活談じ、又色々の旅行の計畫などを話し合つて居るうちに、ふと同君の故郷が非常に地狂言の盛んな土地であることを知つたのは、大正十一年の頃のことであつたかと思ふ。其時に自分はちやうど、丹後越後などの風俗問狀の類を読んで居て、たしか斯ういふことを言つたやうに記憶する。芝居の本體は元は三番叟に在つた。其あとに追々新らしい狂言が附演せられたのが、後には興味の中心となつてしまつて、三番叟から見物しようとする人は殆ど無くなつたが、それは恰も禰の實の小僧の部分ばかりが、目に立ち鳥に啄まれるのとよく似て居る。だから古くから地狂言の盛んな村は、曾てその「三番叟信仰」が根強く行はれて居た土地と推定しても、一應は理由があるといふやうなことを言つた。花祭といふ語を私が始めて耳にしたのは、即ち此序であつたのである。

早川君自身の花祭研究も、大よそ其頃を發端として居ると言つてよい。同じ設樂郡のうちでも、君の郷里は鳳來寺の峯よりは南で、自身此祭に携はる村では無かつた。稀に祈禱

の必要あるに際して、北の山あひの村から頼んで来て、舞つて貰ふのを見たといふに過ぎなかつた。それが我々の勸説に由つて、地狂言に關する小さい時からの見聞を書いて置かうといふことになつて、或は是と關係があるかも知れぬ花祭に、説き及ぼさずには居られなかつたのである。單なるうる覚えや又聴きの程度を以て、止めて置くことの出来ない性質を、早川君といふ人は持つて居る。さうして見に行つた結果が、終に斯ういふ大變な事になつてしまつた。學界を驚倒せしむる千六百頁の大著は出現し、苟くも民間藝術を談ずるの士は、之を知らなければ恥といふまでになつた。大體に今の所では珍らしいものが残つて居たといふことに、ほゞ世評は一致して居り、私も亦之を信ぜんとして居るが、なほ無邪氣なる感想を披瀝するならば、珍らしいのは物それ自身であるか、はた又その残り方が珍らしいのか。實はもう少しく經つて見ないと分らぬのである。もし假に自分の想像の如く、設樂といふ郡名郷名の起る前から、既にこの山地に伎樂の定住する者があつたのならば、其歲月は優に奥地に在るものを修驗道化せしめ、一方平野往還の衝に立つものを、

地狂言村芝居たらしむるに足りたのである。さうすれば更に轉じて北武藏の桐大藏、又は總州在の市川海老藏等も、是と脈絡を引いて居なかつたとも斷言は出來まい。三河は今に至るまで諸種の演奏藝術の簇生地であつて、それが如何にして斯くの如くであるかも、實はまだ決して明かになつて居ないのである。此等の問題は終局に必ず總括して答へらるべきものと思ふが、兎に角に我々の固有信仰が曲折して、なほ現代に保存せられて居る如く、古い藝術も確かに残つて居るではあらう。只今日は僅かに其或部分の、後に新たに附加せられたものを知るのみで、其他の部分かどの程度にまで昔を留めて居るかといふ問題は、腰だめ以上にはまだ之を推斷する道が無いのである。「事實」が何物よりも切に入用である。従うてこの早川君の綿密なる中間報告は、少しでも早く出過ぎたと言ひ得る人は無い筈である。

少し遅過ぎたといふことは、今でも私は言つて見たい。實は我々は今少し小東にからげて、度々にこの貴重な材料を持卸して貰ひたかつた。さうすれば餘計な假定説の爲に、心

氣を勞することも少なくて済んだらうに、自分等は何か夜に入つてから牡丹餅を貰つたやうな感じがせぬでも無いのである。たゞ幸ひにしてこの隣の杵の音は、幾分か我々の消化力を刺戟して居てくれた。特に早川氏の郷里に限つたことで無く、他の地方でも仔細に觀察すれば同じ事かも知らぬが、今まで聽いて居た同君の話の中にも、驚いたり心付いたりすることは既に多かつた。たとへば同じ獅子舞でも、豊天龍二川の水域に行はれて居るものは、獅子の面を被つたまゝで、政岡にも三勝にもなつて見物を泣かしめるといふ話。斯んなことは自分等の全く知らぬことであつた。獅子舞の如く近代に入つて漸く普及したものでさへ、地方によつてはもう是だけの差異を生じ、又次々の様式と結合をして居るといふことは、古風の残留を説かんと欲する學者の、是非とも念頭に置くべき事實であると考へさせられた。それから尙一つびつくりしたのは、淨瑠璃御前の生命の永續であつた。この長者のまな娘の一生涯は、會て義經記の傳ふる所を以て盡きて居り、所謂十二段の冊子などは、たま／＼其舊譚を復活せしめたゞけかと思つて居ると、東三河には處々に此女性

の塚があり、庵室の跡があり、又之を仲次とした信仰さへもある。鳳來寺の峯の薬師の靈驗奇瑞が、この物語に由つて美しく描かれて居たことは、何人にも推測が出来るだらうが、それが現代に近づくまで、是程の勢威を昔の土地に、持つて居たことは意外であつた。それで私は爰にも或は熊野同様の歌比丘尼が、此信仰を背景として永く住み、それが諸國を巡遊して、往々にして小野のお通とまがふ様な才女の、美しい本地譚を物語る者を出したのかとも、想像を逞しうして居るわけである。少なくとも土地に成長し又繁榮する信仰があれば、古い「海道下り」の簡単な一曲でも、之を十二段の語り物まで發達させることが出来た。だからもし設樂郡今日の花祭伎樂が、果して全國に比類無く完備したものだとするば、それを上代弘く存したものの、壞れ残りとする前に、先づ其原因を環境の新らしい力に求め試みるのが順序である。

確信は素より事實を知つてから後のことであるが、更に是以外に第二の假定も亦成立し得る。現在の花祭地域なるものが、水筋からいへば天龍流域、嶺でいふならば鳳來田嶺の

一方の側面に、限られて居るといふのも偶然で無いかも知れぬ。信仰行事の神秘に參與する者が、靈山背後の盆地に隠れ住むといふことは、現に類例もあり又理由もありさうに思はれる。記録傳はらず口碑は證言する無くとも、附近の古くからの大きな信仰と、住民の今も持ち傳へて居る藝術との間に、曾て關係が有つたのでは無いかどうかは、一應は考へて置いてよいことである。

其次にもう一つ自分が此書を細讀する前に、多少冒險の心持を以て、試みに述べて置きたいと思ふ假想は、この東三河の二つの山の宗教業者が、もと熊野の三山に仕へて、諸國を歴遊して居た人々と、海上の交通があつたのでは無いかといふことである。熊野の古傳は今甚だしく散亂し、又頗る改造せられて居る。その古來の事實と稱するものとても、警戒無しに受入れることは到底出来ないが、少なくとも是が内陸各處の固有信仰と比べて、幾つかの異色の目に立つものを有つことだけは確かである。従うてそれが三河方面にも入つて居たか否かは、絶対に證明し得られぬ問題では無からう。さうして此神々の始めて熊

野に飛來せられたのも、それから其信仰の更に東方に向つて流布したのも、共に其輸送は最初には皆船からで、しかも一旦上陸して後は、随分險阻なる山の上まで、持運んで行くことを厭はなかつた。海より往來する者は皆平地人であるやうに、今日は想像せられ易いが、事實は寧ろ其反對であつたことは、海部移住の跡を見たゞけでもよく判る。だから證據は今後の早川君、及び其同志の手を煩はすの他はあるまいが、行く／＼或は三河山村の花祭も、遠く岸邊傳ひに遙かなる島山陰から、人知れず入つて來て爰に保存せられ、又進化改良したものであることが、判明して來ぬものとも斷言は出来ぬのである。中世以降の熊野移民は、確かにこの三河北境の山地にも來て居た。江戸の御家人の鈴木主水、其他多くの鈴木家は其後裔であつた。南朝に忠を盡し笠置赤阪で戦つたといふ足助氏も、亦其一派であつたと言はれて居る。續群書類從に採録せられて居る足助八幡宮の縁起を讀んだ者は、一人として是が熊野の系統に、屬することを否み得ないだらう。後に行はれた熊野人移住に由つて、直ちに其前にも移住があつたことを、類推することは粗忽かも知れぬが、

兎に角に設樂は熊野信仰の入込み得ない土地では無かつた。

私は始めてこの花祭の存在を聴き知つた時から、實は先づ天龍の大川の水の、今よりもより豊かに流れて居た時代を胸に浮べて居た。後に地圖を開いて親しく早川君の口から、此伎藝の流布状態を説き示された際にも、特に大入川の水域と振草川の水域との間に、何か著しい互ひの相異、又それ／＼の内の一致が無いか否かを、今後注意して貰ふやうに頼んだのであつた。さうした所が此書物にも詳しく述べられて居るやうに、果してその外の差別、内の一致が大いに有つたのである。何が其中の最も主要なる部分であつたかは、私も是から細心に學び、之によつて改めて此假定説の運命を決しようと思ふ。何人も容易に認め得る如く北設樂郡の居住適地は、殆ど此二川に由つて作られ又支配せられて居るが、それが天龍の川合に到達する前、一里ほど上手に於て合流し、それから各河内に分れて行くのである。然るにちようど其分岐點に近い僅かなる急傾斜面に、花山といふ古い一部落がある。地形から云つても又村の名から考へても、我々の研究には重要な關係があらうと

思ふが、現在の村の人は専ら其注意力を華山法皇御遺跡といふ方に引かれて居て、頓と此相談に乗つてくれず、又實際さういふ材料も無いらしいのである。假に此花山のハナと花祭のハナと、何の因縁も無いものと決しても、二つに分れたものゝ本は一つであつたことのみは、天龍大川の流を見ただけでも大よそは考へられる。多分の論辯を費すことは、我の學問には禁物であるが、大體に於て今日問題となつて居るのは、此舊慣は曾て或時代の國民の間に、到る處一樣に行はれて居たものが、希有に此山地にばかり消え残つたと見るか、はた又最初からは限られたる二三の部曲のみに行はれて居たものが、筋を引いて爰に來て落着いたものとするか。この二つが花祭起原論の、分れ目になつて居るやうである。さうして私は他日或名説によつて説服せられる迄は、今は兎に角に後の方の意見に傾いて居るのである。農法とか婚姻元服の手續きとか、人がまだ小さな群であつた頃から、持續して居なければならぬ慣習ならば、或は他の地方には見當らぬといふ事實を、忘れた落した棄てたと解してもよからうが、伎藝には殆ど初發以來、深秘口傳もあれば特殊の習

練もあつて、家が世襲せぬまでも部曲としては獨占して居たのである。假に地方毎に同じ目的の行事はあつたとしても、各箇の所傳は起りから別であつたかも知れない。ましてや後代に入つて、變へなければならぬ原因は幾らでも現はれて居る。之を直接に上代の一般的な信仰生活を、反映するものと考へてかゝることは、如何にも不安全なる前提である。もしやさういふ心持に基づいて、この花祭の遺習を尊敬して居る人があるとすると、末の興さめ又は反動的冷淡を豫防する爲に、特に聲高に自分のやうな假定説の、成立し得ることを唱へて置かなければならぬ。

自分たちは假に花祭が熊野傳來のものと決定しても、其爲に古式のなつかしさを些しでも割引することは無いつもりである。各地それ／＼に成長した技藝の中に、どこにも行渡つて會てはあつたもの、さうして今は大方埋没し盡さんとして居るものが、幸ひにしてこの花祭地域にはまだあつたからである。概括して或は中世心とも名づけてよいもの、無論其中には多分の古代分子を含むものが、心から面白い眞冬の祭がまだ残つて居た御蔭に、

たとへ鬚髯にでも之を窺ふことを得たからである。歌舞に携はる者と見衆の大半が、共通に今でも持つて居る物忌み慎みの心、個人的では無い公の信心、日常心理を以て解釋し難い昂奮と感動、他にも何と無く失はずに持傳へて居た色々の情緒の、言葉で寫し得ずとも居合はす者には感じ得られるものは多かつた。それを早川君の此記述は、始めて文字によつて出来る限り、之を客觀の人に知らせようとして居るのである。藝術發生の宗教的起源なるものは、外國の學者には實は資料を獲ることが一難事であつた。日本は珍しい國であつて、都市の最も開けた芝居の中にすら、僅か注意をすればなほ其痕跡だけは見出される。しかも花祭のやうに濃厚に今も演技の呪術價值を認めて居る例はもう澤山には無い。さうして又此一筋の道を通つて行く以外に、所謂凡人大衆の遠い祖先の生活に、近よつて見る道は無いのであつた。

神祇の歴史が記録を唯一の典據とし、訓詁註釋の學風が社務社職の人々を統御するやうになると、早くも之に拮抗して實驗派の神道は起らざるを得なかつた。行者の説教には多

分の我見獨斷と、雜駁の哲理とが織込まれて居るだらうが、その主要なる威力は却つて彼等の直覺裡より得たものに在つた。それも恐らくは貴重なる傳統だらうと思ふが、悲しい哉彼等は之を外間の者に、傳へる道を知つて居ない。學問は到底何物をも是に期待するところが出來ぬのである。それと同時に他の一方に於ては、白人土俗誌家の異民族、殊に彼等が憐れみ見んとする黒人赤人に對して、今まで取り來つた態度を模倣して、僅かなる接觸面から知覺に上るものだけを拾はうとすれば、如何に記述は精細であらうとも、其及ぶ所の求むるものと遠いことは、知れ切つた話である。自分等は今ちようど新舊文化の境目に立つて、眼の前に昔の退き去らんとする後影を見送り、なほ時としては願望し低徊する者の淋しい面ざしにも接して居るのである。是を同胞の親しみと理解とに寫し取り、後に來る人々に見せることは、測らずも今の時代に生れ合せた者の、當然の一つの役目である。さうして將來この事業によつて利益する者は、斷じて又一國境内の學問ばかりでは無いのである。斯ういふ機會は誠に得易く無い。國を同じうし郷土を共にする者の間に、記述者と記述

せられる生活とが相鄰し、しかも隔意無き平等の交りを許さるゝ状態は、さう永くは續いて居ることが出來ない。この關東の平原などにも、つい近い頃までは村々の神事舞なるものが有つた。氏子はその全部を擧げて祭毎に出で、是に仕へ、役者と見者との差別は單に年の分擔に過ぎず、過去と將來の役者こそは、寧ろ現在の最も熱心なる見者であつた。それが都邑の人多き土地を始めに、瞬くうちに一方を藝人とし、他の一方を棧敷の人としてしまつて、曾て雙方の間に通うて居た信心の痕は埋もれ、之に代つた新しい藝術の約束の音が段々に繁くなつた。所謂醒めたる人の微笑又は懐手が、かの古風なる感興の統一を妨げたことは言ふまでも無いが、それが假令同情ある研究者であり、もしくは熱烈なるファンであらうとも、神でも靈でも無い者に、外から見られて居るといふ心持は同じである。やがて純然たる見る物になつて行く道筋が、開けたといふことは同じである。勿論そつと置いて置いた所で、古風なものは消えてしまはずには居るまい。たゞ許さるゝことならば自分たちの手で以て、このいつの世からとも知れぬ不斷火は消したくない。單なる一個の記

念塔を立てる爲に、この年久しい泉の源を掘りかへしてしまふのは惜しいといふこと、是が今日の郷土研究者の、等しく抱いて居る自家撞着であつた。進んで行く國の民俗學が、斯ういふ客觀の學問でありながら、常に一味の哀愁を帯びざるを得なかつた所以である。

川君の著述が此意味に於て、一方に保存の大功を立てると共に、他の一方に幾つかの高價なる無意識を、切りほどき打ち散らしたことは誠に是非に及ばぬ。自分はせめて其批判が至つて乏しく、解説の甚だしく臆病であつたことを、一つの慰安とさへ考へて居るのである。

果してこの用心深き、寧ろ思ひ切りの悪い態度が、他に何人ばかりの讚歎者を、得るであらうかを私は知らない。しかし少なくとも現代の文化史學は、斯ういふ中立透明の資料を要求するのである。まだ日本の國內にどれ程の同系異種、はた又異系類種の藝術が分散して居るかも分らず、土地と四境の往來とが、千年の間にどれだけ迄の影響を、是に及ぼしたかを察し得ない限りは、其由來に關してたゞ一個の假定説のみを掲げることとも不可である。ましてやそれに若干の感激を附け添へて、人を宗教風なる一種の確信に、導かんと

することは猶悪い。假にさういふ傾向が世に生じたとすれば、之に對する方策はたゞ一つ、即ち裸なる多くの事實、其眞僞の簡單に確かめ得るものを、排列して置くより外は無いのである。私はもと歌舞の道に暗く、殊に今までに諸種の實例を、目で見て比較するだけの餘暇を持たなかつた。従つて此手は世に稀なりと稱し、此節此拍子は古今たゞ花祭あるのみと教へられて、假にそれが虚偽であらうとも、黙つて騙されて居なければならぬ者である。しかし幸ひなことには是に伴なふ所の歌詞説話、及び之を構成する語辭に付いては、三四全く此地方と縁の無いものを集めかけて居る。早川君は能く我々將來の講學者の爲に、今用ゐらるゝ限りの歌ぐらと語りごと、それから文書に載せられて人の既に忘れて居る若干をも蒐集してくれた。其中に果して古代の日本語を材料として、設樂の山奥に於て單獨に組み立てたもの、乃至は世上の詞章が足利期以後の所産なるに對立して、こゝばかりもつと古くからのものを、保存して居たといふ例があらうか。少なくとも以前自分等の窺ひ知る範圍に於ては、句形其他の表現の様式を云ひ、又は構想と云ひ要旨と云ひ、何

れも遠近の諸國に於て容易に類型を求め得るもののみで、一として此山間に在つて自然に醗酵し、聊かも旅途の風塵に浴しなかつたといふものを、見出すことは出来なかつたのである。設樂は如何にも僻陬の山地には相違無いが、長い歲月の間には様々の落人も來り隠れ、四方の漂泊者も入込んで足を駐めて居る。現に私が前に公表した江州愛知郡の木地屋などは、既に數百年の昔から多數に此地方に入込み、津具の盆地を一つの中心として、彼等の林間文化を發達させて居るのであるが、其進路はやはり振草川の流であつたらうと思はれる。時降つては天龍の筏師等、屢々江戸大阪の材木師を誘ひ來り、又は尾州津島の師職たちも、例の彌五郎殿の信仰を持込んで、それが浪合記の文學を成長せしめたことも、阪部熊谷家の舊記などを見れば察せられる。此等の人々の將來した特殊なる生活方法は、勿論一隅を占據したばかりで、完全なる融合を見るには遠かつたであらうが、さりとて相互に何の接觸感化を見る無くして、獨り文藝の上のみに、是だけ顯著なる混同を見て居るものとは考へられぬ。其上に諸種の因縁は未だ悉く我々の觀察に上つて居るのでは無い。

奥羽九州の邊土は申すに及ばず、嶺を連ね一つの水系を以て結ばれたる山地すらも、まだまだ學問の斧斤は入つて居らぬのである。早川君の捜査は現在のところ、北は未だ木曾惠那の谷々に及ばず、東は氣多大井の流域にも擴張せられて居ないが、此方面に於ける痕跡は、幾分か既に微弱であるらしき上に、さしもの熱烈なる知識欲も、今はまだそれに分つだけの餘裕が無いのであつた。しかし兎に角にこの豊富な資料が、恰かも好し世上の向學心が漸く目ざめ、必ずしも新奇痛快の説に陶醉して、容易に自得してある能はざる状態に在るに際して、突如として我々に供給せられたのは慶賀すべきである。民間傳承の學は之に由つて、改めて大いに興るであらう。何よりも嬉しい自分たちの希望は、結論が今はまだ下されて居らぬといふことである。

(昭和五年三月三日)

宮良當壯編『沖繩の人形芝居』

行者(アンジャ)と稱する妻帯の毛坊主は、芝の増上寺に從屬した三戸の田中氏が有名であつた。しかし勿論淨土宗だけに限つた部曲で無いのみならず、寧ろ其名前から、本來は禪家のものであつたことを推測せしめる。『滿濟准后日記』の應永三十四年正月十九日の條にも、健仁寺の行者下部竝に祇園大路の地下人等が、細川右馬助の内の人々と、湯屋で大喧嘩をしたことが見えて居る。此名稱はつまりは中世の採用であつて、語と共に其様な階級が始まつたのでは無いのである。文政十三年七月二日の京都大地震には、深草の寶塔寺では菴者住居と、雪隠二箇所とが潰れたと云ふこと、住職の手紙に記されて『浮世の有様』と

云ふ日記にあり、法華宗にもそんな者が居たことが知れる。古くから行はれた太秦の廣隆寺の、九月十二日の牛祭の祭文讀みの役も、寺中の行者が紙衣を着て之を勤めると、『日次記事』には書いて居る。つまりは古く寺賤とも名づけた寺々の世襲の下役人の如き者を、或時代にアンジャと呼ぶことが流行したのである。首里のアンニヤが海を越えての移住も、之に由つて凡そ其年月を算へることが出来よう。此系統の所謂職人にして、元の寺には住みあまり、世間に出て生活のよすがを求めた者は色々有つたが、中にも院内と云ふ者が、最も沖繩の京太良に似た所が多い。此徒の主たる職分は萬歳の祝言であつた。九州では筑前の某々寺に縁故の深かつた寺中と謂ふ民が、人形を舞はして里々を巡つた。寺中も院内も語の意味は一つである。機會の許す毎に、僅かばかりの宗教を利用して居たことも、亦彼等に共通な特性であつた。人形舞はしの職業化は、からくりとはりこ細工との輸入を以て一時期を劃して居るが、南の島の同業はまだ其恩恵に浴する以前に、遠く斯うした地平線の外まで、漂泊したものであるらしい。是も一つの消極面の史料である。

京太良の章句のうちで、鳥刺し舞の一曲は明白に大倭から携へたものである。自分は曾て何かの書で、其詞を見たやうに思ふが、どうしても今之を見出して比較をすることが出来ぬ。しかし少なくとも此推測の空で無いことだけは、盛衰記の淨瑠璃の布引の瀧の一齣からでも、證明することが難くないのである。之と對立して馬の舞の一篇は、新なる島地の産で無いかと思ふ。もし此推測が誤り無くば、此類の遊藝人の移住力と共に、どの位までの同化性を具へて居たかと云ふ點を、窺ひ知る便宜にはなるので、宮良君のたつた二日の骨折が、意外に豊かに酬られたことは、もう慶賀してもよさうに思はれる。

此篇の附録には、伊波普猷氏の文庫に在つた京太良詞曲集を掲げて置く。さまで古い時代の採集では無いと見えるにも拘らず、是と宮良君が最後のアンニヤから、直接に聴取つたものとの間には、著しい相違が見出される。文字の無い傳承者は、往々にして此の如く、興味と心持とのみに忠實であつて、結局は時代と環境とに雇はれて、古い物を作り替へる役を勤めて居たらしいことが、之に由つて推測せられるのみならず、他の一方には久しく

我々の抱いて居る疑ひ、即ち此民族の言語が、特に生活と心情の影響に敏活で、従つて方言の變化を來だし易い性質を、もつて居るのではないかと云ふ問題を、或程度まで答へて居るやうに思ふのである。沖繩でも大倭でも、古來學問は中央少數の恵まれたる階級の獨占であつた。先づこの無用の垣根を倒して、自由なる立場から物を觀る人の數を増加しなければ、一箇の民族の運命は之を説くことが難いのである。首里の郊外の藪陰に、淋しく残つて居た三戸の民が、もし我々をして人間の智慧にはむらと隅の多いこと、此世にはまだ知らねばならぬことの澤山に打棄てられてあることを、覺らしめ得たとするならば、それこそは佛菩薩の因縁の、永く彼等に繋がつて居た證據である。

(大正十三年歲晚)

白野夏雲作『十島圖譜』

白野夏雲翁の生涯については、既に龜田次郎氏の調査によつて、其大要を知ることが得たのであるが、自分はなほ四十年來の一つの空想を棄てることが出来ない。斯翁の出所進退にはたしかに若干の故意の韜晦があつた。さうして珍らしい其氏名は、どうやらその全部が後年の製作に係るらしいのである。幕末維新の人物中には、一時の變名を以て世に出てしまつた者が折々は有る。白野といふ苗字は有つてもよい苗字だけれども、江戸でも甲州でも又他の地方でも、つひぞ耳にしたことのない家名であり、しかも餘りによく夏雲の號と調和し、且つ兩者を一貫して、餘りに適切に其持主の事業と經歷とを表現して居るやう

に思ふ。自分は弱冠の頃に、屢々此人の文章を讀んで、いつも斯ういふ氏名を名のる氣になつた筆者の心境を、譬へ様も無くゆかしく懐つたことであつた。

翁が晩年に還つて奉仕したといふ札幌神社、又は鹿兒島縣廳の舊記録を搜したならば、履歷書に其出生地だけは出て居ることであらう。それを手掛りにして尋ねて行けば、古い事では無いからまだ少しは明らかになる點も加つて來るかも知れぬ。しかし私たちの實驗に依れば、傳記は通例は用も無い部分のみが多く現はれ、却つて色々の臆測を誘導するに過ぎない。殊に先生の學問に師傳が無く、單に時代の變化に先づ目ざめて、羈旅の間に在つて感發し味得したものを、積んで大きくして行つたばかりだとすれば、その刻々の企畫と念願とは、恐らくは日記にも之を言ひ現はすことは難かつたらう。まして後人の察し知ることが、此方面からは望めないのが當り前である。學者を知らうとするには其著作に據るの他は無い。さうして幸ひに爰に最も肝要なる幾つか、我々の間に保存せられて居るのである。永井龍一君が曩に『七島問答』の正續二篇を複製して世に頒ち、今又この『十島

『圖譜』の自筆本を、ほゞ原圖の通りに映印して、心有る者の手に留めようとせられることは、獨り南方の荒海の上に孤存する道の島々の住民を欣喜せしむるのみでは無く、兼て又一人の忘れんとする學徒に對する何よりの供養でもあつた。白野夏雲といふ人はどんな人であつたか。西洋の文化の新らしい色と香とが、殆ど一世を陶醉せしめようとした時代に、前には北邊の曠野に在つて夷人を友とし、更に身を醜へして南島の離れ小島の、一つ／＼を訪ひ寄つた彼の志は何れに存したか。是に答へ得る者といへば、今はたゞこの數卷あるのみである。遭遇は假に運でありはた偶然であるとしても、なほ人間の力の是に干與し得るものであることを、お蔭で私たちも經驗することが出来たのである。

十島は久しい間、たゞ地圖の上の一奇現象であつた。單に其島影を望んで馳せ過ぐる者は、年に何千といふ船の數であつたが、親しく足を其土に踏み立てた者は誠に尠なく、島人がこの壺中の天地に於て、如何に生死し盛衰しつゝあるかを、省みる者は愈々稀であつた。我々の知る限りに於ては、この白野翁の外に、前には田代安定氏あり又中田直慈氏あ

つて、島を視察して其報告を世に傳へてゐる。最近には故岸上鎌吉博士が、魚族調査の爲に數週を各島の間を過し、歸途車中に於て半日の見聞談をせられたことは、自分に取つては意外なる好記念であつたが、多分其折の紀行は留められて居らぬことと思ふ。永井君が隣島奄美大島の出であつて、頻繁に是と往來するの機會はもたなかつたにも拘らず、終始十島と其憂喜を分ち、更に島人をして少しなりとも知らるゝ者の悦びを味ひ得しめんが爲に、此書を公刊して之を島々に配布せんとせられることは、天界の白野夏雲翁もし知るあらば、必ず莞爾として點頭せずには居らぬであらうと思ふ。

(昭和八年三月)

(追記)翁の官歴と生歿年次とは文書に據つて是を明確にすることが出来た。翁の前名は今泉耕作、中ごろ其故郷の村の名を採つて白野の姓を設けた。幾つの年の事であつたか知らぬが、翁は甲府に出て行つて或幕臣の家に仕へた。後九州に行き、それから東國に還つて來て暫くは駿河にも居住した跡がある。多分明治のごく初めに、徳川氏の遺臣と共に十島

國に移住し、同五年に開拓使の徵職に就いた。白野は甲州路の一驛であつて、今は笹子村大字になつて居る。

伊能嘉矩著『臺灣文化志』

最終に伊能氏と會談したのは、七年以前の新秋のある夕である。遠野の旅館の打開いた二階から、暮れ行く周圍の山野を指點しつゝ、昔今の物語は盡きなかつたが、特に自分の尋ねて見ようとしたのは、此地方の學問の由來であつた。何物の機縁が當代の文運に際會して、かゝる山間の一盆地に我伊能氏の如き、希有の篤學者を産するに至つたかといふこ

とは、實は不審と名づけてもよい程の内心の驚愕であつたからである。

先生の答は此問に對して、必ずしも明辯周到でなかつた。試みに其日の手帖を取出して見ると、遠野の教育は案外に歴史が淺く、且つ概ね異郷偶遊の客に負ふ所多しと言はれて居る。元文の末年とかに、久子小五郎號を翠峰といふ者、遠く來つて始めて經學を此邑の子弟に授けた。次いで飯田勘助といふ一浪士あつて、書堂を開いて講習の業に従ひ、就いて學ぶ者漸く多かつた。二士は共に故あつて世を避くる者の如く、曾て精細に其出自を述べたことがなかつた。傳ふる所の名字も、亦果して其本有なりや否やを決し難いといふ話であつた。如何にも二百年前の奥州の小都市は、世途に望みある者の安じて久しく住すべき地ではなかつたらう。所謂失意流離して寧ろ埋没を甘なふの輩が、たま／＼其餘生を邊遇に營むことに由つて、測らずも種を未墾の沃土に留めた例は少なくないのかも知れぬ。しかも喬木の質を二葉の日にトし、歴世愛護して終にこの亭々として仰ぐに堪へたるものを大成した力に至つては、之を客寓の士に期待することは難かつたことと思はれる。伊能

氏と遠野の郷土との因縁は、板澤君の文能く之を説き盡して居るが、自分は今に於て儼乎たる傳統の、寧ろ先生が家に保持せられて居たことを知るのである。

伊能氏の「家の風」は、學問と名利と、半點も相交渉しなかつたことが、その大なる特徴の一つに算へられる。最近の所謂史學隆興の眞只中に於てすらも、少なくとも臺灣文化の研究は獨歩であつた。先生にしても其功に居らんとしたならば、何人能く之を争ふことを得たであらうか。しかも終生刻苦して自らは其完備を認めず、僅かに遺編を以て惠を後代に留めんとするものである。かの倉皇たる世上幾多の士、付託屢と背き聲譽先づ馳する者、之に對して眉を伏せ、面を掩ふべきは固よりながら、更に驟つて統治三十年の久しきに亘り、天朝の爲めに異民を子育し、その文化を指導するの任に在る者が、幾たびか篤學の士の求むる所薄きに乗じて、供給助めず勞苦必ずしも報いず、今はた安然として其成果の豊かなるに就くが如きは、是を現代の通勢と名づけ得べしとするも、なほ且つ我々は矜持ある極東の一民族の爲に、懽然として愧ぢまた悲まざるを得ないのである。

或は環境の力、時代の感化に對して、人は既に隱然として負ふ所あるかの如く、考へて居る者があるかも知らぬ。然らば學者は果樹園の桃李と同様に、欣んで其所産を呈すべき義務ありとも見えるが、少なくとも我伊能氏の場合に於ては、明瞭に其見の非なるを知るのである。伊能氏が壯志を抱いて、出で、首都の客となつた頃に、新らしかつた學問は故坪井教授の人類學である。尙敏なる一讀書子の忽ち其眞義を會得して、耳を講説に傾けんとしなかつたならば却つて不思議である。しかも學業を單なる祖述布衍に止めず、之を同胞眼前の實生活に適用し、更に進んでは南方新附の民族の爲に、記録を有せざる者もなほその過去世を闡明し得べきことを、確めんとしたのは何人であつたか。先生は嘗に其首唱であつたのみならず、暫らくは之に呼應して繼いで起る者すらも無かつたのである。伊能氏の志がもと修史にあつたことは、この文化志の雄篇が充分に之を立證する。しかも人類學は之に供與するに、一箇愷切なる人間研究の新方法を以てしたゞけでは無い。却つて其因縁に基づいて意外なる幾多の刺戟を受け、又無限の資料を此方面から逆輸入して居たので

あつた。それが先生の臺灣調査の餘材であつて、且つ學會は屢々之に頼つて、その沈滞の日を支持して居たのを見れば、大に負ふ所ある者は寧ろ我伊能氏でなかつたと言ひ得るかと思ふ。

少なくとも先生は常に與へんと欲する人であつた。殊に學藝の廣衝に立つて、夢寐にも故山隴畝の人を忘れず、驪つてその南窓歸臥の日に在つて、未だ曾て四海の志を失はざるに至つては、尋常世を慨き自ら高うするの士の到底企て及ぶ所で無い。東北の人材雲の如くなりと雖、先生に由つて始めて學者の郷土愛なるものゝ、別様に深切なることを體驗し得た者は多かつたのである。蓋し先生生涯の學問を一貫して、特に精力の傾注せられたのは常民の歴史であつた。微々たる散在の舊記録に依據して、地方前代の文化を究めようとしたならば、其結果の少數土豪の盛衰を説くに止るべかりしことは、東北も亦支那海の一孤島と同じであつた。しかも志を中原の角逐に絶ち、限りある既存の知見に閉籠つて、夜郎の俊傑を以て自ら任ぜんとした場合に、其術の行はれ易かつたことは、前者は却つて科

舉の邦に超ゆるものがあつた。然るに獨り先生あつて、夙に此流風に安ずる能はず、出でて國內の殊に省みられざる者に就いて、敢然として事業の最も完成し難きものを試みんとしたのである。其意の存する所恐らくは一臺灣でなかつた。

日本の學問の中央に偏重にして、單に京華の文運を修飾するに過ぎなかつたことは、必ずしも近年の傾向といふことが出来ぬ。此頃漸くにして大學は地方に興つたけれども、少なくとも其規模先例に於て、一として之を首都に仰がざるもの無きかの如く見える。若しそれ奥羽の曠野に家居して、寂寞として書を草萊の裡に講ずる者に至つては、假に祖國民人を顧念するの情に於て厚く又切なるものありとしても、なほ且つ大志逸才の士の來り導くを待つ他無かつたのである。むべなる哉先生出でてより、一郷先づ化し、次で此鄰の苟くも其名を聞く者は、翕然として學問を未拓の地に期待するやうになつた。田村將軍以來、悠々たる一千餘年の間、無名沈淪してしかも往古の傳承に忠實なりし人々、爰に始めて知られ訪らはるゝのみならず、時あつて更に古意の中州に志失せられたものを、補充す

ることを得るに至つたのである。故に『臺灣文化志』の最後の原稿が、陸中遠野に於て完結したといふことは、之を單なる一奇遇と解することは自分には許されぬ。是は正しく著者が其故郷の爲に、一大精進を以て建立したる記念碑、人間の歴史を基礎から觀察しようといふ地方學問の獨立宣言として、永く題目の外に在る人々からも、共に與に仰ぎ望まらるべきものであると思ふ。しかも先生長く逝いて血食嗣がず、その業半ばにして或は散佚の虞を抱かざるを得ぬのである。今この遺篇の辛うじて世に公にせらるゝに臨んで、且つは暗愁の胸に迫るを感じるのは、必ずしも故人を思慕する者の私情で無い。先生は寔に學者の典型であつたが、既に我々は之を喪うたのである。獨り北邊南陲の一地方のみと言はず、けだし昭代文運の前途は、總括して之に倣ふ者多きや否やに係つて居る。而うして自分は今ほ心窃かに危ぶむ所があるのである。

(昭和三年九月)

江川俊治著『ハルマヘイラ島生活』

この十何年の間を通じて、江川君の生活は誰が見ても冒険家であつたが、自分の嬉しいと思ふのは、彼には冒険家一流の臭氣がちつとも無い。功名心の刺戟が無くて、事業の艱難と闘ふことは、俊傑の士と雖猶容易では無いのに、彼はいつでも獨りで、些しづつの成績を楽しんで居た。取りたい儲けたいは殆ど此世紀の病であるが、それにも天性が丈夫であつた爲か、ひどい流行地に出入しながら感染をした様子が無い。せめて旨い酒でも折々は飲まなければ、汗水を垂らして働く張合ひが無いなどと、さも當然の様に人はよく謂ふけれども、江川君は酒が嫌ひである。或は損な話であつたかも知れぬ。しかし其代りにはま

だ荒びない青年の感情を持つて居る。

ハルマヘイラは熱帯にしてはじみな島だ。茫洋たる千古の樹海の中に、僅かの土人が安逸な生活をして居る。其以外には象も居らず、虎も居らず、鱷も蟒蛇も皆無害で、たつた一つの怖ろしい物と謂へば、熱でも無ければ熱病でも無い、明るい緑色の寂寞である。

即ち世間普通の冒険家の、何でも行かねばならぬと云ふ程の島では無い。要するに話にならぬ島だ。そんな島の生活を書いて、面白い書物が出来たと謂ふならば、それは全く江川君の技倆で無くて器量である。日記を忠實につけたと謂ふよりも、其日記の種に爲る生活を、精確に導いて居たからである。此一團のやうに單純で且つ熱心な生活をするならば、我々の日記でもきつと面白いのだが、遺憾ながら今の日本ではそんな生活をさせてくれない。

江川君がたまたま島から戻つて来て、頭を掻きながらさも面白さうに、失敗の經驗談などをするのを聴くと、自分はどうかして早く或程度の成功をさせて見たいと思ふ。彼の如く

成功を最終の目的にしてゐる人、事業を以て手段とは考へて居らぬ人でも、やはり拍子や金銀の音などを聞くと、一遍はごろりと休息をして見なくなるものか、はた又一つ完成すればすぐに次の仕事を尋ねて、新しい艱難の興味の中になほ奮闘三昧の精進を續けるであらうか。それを實驗させるやうな先例が、今迄は無かつたからである。

しかも自分が常にこの仲間に向つて謂つて居るやうに、諸君は勿論羅馬の國技館に於て、獅子と闘はしめられたグラチャトルでは無い。假に不幸にして意外な行詰りに出遭つても、無理を押切つてまで終局を見る必要は無い。平然として還つて来て、靜かに蹉跎の原因を考へて見るがよい。如何に計畫が尻切蜻蛉に終らうとも、乃至は花々しい好成績を挙げようとも、眞面目な生活ならば其記録の價値には増減が無い筈だ。そのみならず、諸君は嗣いで興る日本の青年に、自然の途を歩んで見せなければならぬ。萬に一つを僥倖するやうな人間味の乏しい冒険は、もうこの愛すべき者に教へてはならぬ。この意味に於ける安泰なる成功を、我が江川團の爲に私は期して居る。其曉には定めて又ずつと面白い日記が、

發表せられることになるであらう。

(大正十年五月渡歐の前夜)

鈴木覺馬編『嶽南史』

鈴木覺馬翁の境涯には、同じやうな學問に携はる者の、慶賀し且つ羨まなければならぬ様な特長が幾つも有る。其一つは三十年前に、志を一つの事業に起して以來、世情と好尚は此通り推移したにも拘らず、終始その遂行に精進して、未だ曾て他を顧念しなかつたといふことである。是は勿論大なる意思の力ではあるが、しかも題目の選定がもし當を失して居たならば、その意志も結局は寂寞を以て酬いらなければならなかつたのである。『嶽南史』の一著が有るべくして久しく現はれず、偶々我が鈴木翁の如き操持堅固の士によ

つて企劃せられたといふことは、乃ち亦一つの遭遇と稱すべきである。

第二に稀有なるは此翁の長壽、老いて愈々旺盛なる氣魄、及び之に伴なふ安靜の心境が、終に一人の手を以て能く是ほどの大著を完成したといふ點である。この種の事業の往々にして半珠の玉の如くなるものが遣り傳はるのは、必ずしも人生の失意悲傷、もしくは貧窮が之を挫折せしめたのみで無い。餘りに華々しく又得意なる者も、なほ屢々其意志を未了ならしめてゐる。ましてや人間の一代は、兩者何れの爲にも十分に長いとは言ひ難く、此の如き博覽廣搜は之に對して、實は幾分か大に過ぎたる事業でもあつた。然るに我が鈴木翁は、一方には許多の人生の波瀾曲折を経過しつゝ、なほ且つ其著の全備して堂々として世に出づるの日を迎へ見ることを得たのである。この餘裕と清福とを羨まなければならぬ者は、今も昔も餘りにも其數が多かつた。

第三の特長も亦大に誇つてよいものである。此種の浩瀚なる書物は、現代の印刷文化を以てするも、通例はさう容易に世に公けにし得るもので無いときまつて居た。それは事業

の世を益すべきと否とに論無く、扶けて之を行はんとする者を糾合するの途が無かつたからである。鈴木翁はそも如何なる徳望、如何なる熱情の人を動かすものがあつたのであるか。一朝にして斯くも多数の郷人舊知等の、躍進し來つて之を支持する者を得たのである。此事實は少くとも半生を書齋裡に没頭して居た者が、尋常其郷人舊知等に豫期し得る所では無かつた。此著の價値の大小は後世に至らずんば實は決定し難い。しかも今日の同志諸君の大部分が、何れも豫期せられし讀者であり又利用者であることを考へると、鬼に角にその一旦の目的は達したのである。この眼前の効果を實驗して、欣々然として抃舞せざる者は無い筈である。鈴木覺馬翁は誠に幸福なる學徒と言ふべきである。

翁はなほ恐らくは此書が郷黨の間に流布して、著々として其用途を明にするの状をも目撃することが出来るであらう。今日は恰かも郷土研究といふ言葉が、文部省の官吏にまで口にせられる世の中である。地方は素より此聲の夙に揚がらんことを望んで居た。乃ち其研究方法の競うて進められるべき秋なのである。普通従來の順序として考へられて居たも

のは、力の及ぶ限り郷土の古書を集積して、之を心有る者の閲讀に供することであつたが、集積は既に難く閲讀は更に多數者に期し難かつた。『嶽南史』は即ち或一人の篤學者が、その三十何年の貴重なる時を割いて、博く郷土に代つて萬卷を讀破した報告である。之を年代に序で事項を標出したのは、悉く後進の爲に豫め搜索の勞を濟うたものである。故に將來の利用者は唯其記述の各自の土地に關し、各自の家門に關する部分に槩を挾んで、多くの子弟をして其前後の之に伴なふ事實を熟讀し且つ考慮せしむれば足るのである。古書の記述は勿論一方に偏して居る。多數庶民の現實の疑惑に對しては、答へんとして答へ能はざるものが少なくない。しかも其疑惑を率直に表白し得る者は、先づ以て此種の成書によつて、前代の記述が果して何れの程度にまで、豫め大衆の間はんとする所に備へて居たかを明らかにする必要があるのである。

幸ひにして其疑惑がもし眞劍のものならば、第二第三の鈴木翁も亦蹶起すべく、嶽南の史學は永く今日の狀に停まつて居ないことゝ信ずる。

(昭和五年十二月)

鈴木鼓村著『耳の趣味』

社会生活の歩みには一定のリズムが有ることを信じて、其研究の爲に半生を費したといふ飯沼一雄氏の事を、一夕自分の家に來て話したのは琴彈きの鈴木鼓村君である。然るに右の鈴木君の家の歴史は、正しく此研究に向つての屈強なる材料であつた。社会の潮流と時代の異動につれて、舊い家が遭遇せねばならなんだ日和と嵐とを盡く經歷して來てゐる。自分は生物學者が卵から次の代の卵へと、鳥の一生を觀察して行くやうな趣味を以て、この一箇の社会現象を分析して見たいと思ふ。

一

諸國の鈴木氏が、戦鬪の方面より地方の一勢力と成つたのは、少なくとも南北朝以前からである故に随分久しいことであるが、自分は此族の植民は本來宗教的のもの、即ち熊野信仰の普及に基づくものと思ふ。明治二十四年頃の史學會雜誌に、鈴木氏を研究した人があつたさうであるが、自分は未だ其結論を知らぬ。兎に角に奥羽地方に於ける熊野の信仰は、今日も猶盛ではあるが起源の頗る古いもので、宗像信仰の衰へた後、八幡信仰の傳播よりは却つて前かとも想像して居る。

鼓村君の家は、磐城亙理郡亙理町舊稱を小鼓と言つた村に、知らぬ昔からあつた家である。家の傳説では、義經に奉公して衣川で戦死をした鈴木重家の末であると云ふ。形の如き口碑ではあるが、是は一種の義經記影響とでも名づくべきものである。村の勝孝院と云

ふ眞言宗の寺内には、此家が主となつて祭事を勤める熊野權現（オクマノサン）がある。勝孝院は修驗道であつたらしい。此社は又其寺よりも古いとも云はれてをる。鈴木氏の女衆が歸依し大壇那となつて建立した専念寺と云ふ時宗の寺にも、後年に勸請した熊野堂がある。山中處々にある古塚は多くは鈴木家の祖先のだと云はれて居て、今の菩提寺の管理して居るものは三四百年來の過去帳のみである。

二

家の記録のある限りでは、鈴木氏は亙理家の被管であつた。亙理氏は亙理郡の名主で海道の舊家である。亙理氏が伊達氏と和睦をして、其最後の主人玄菴齋基宗が、御一門格を以て知行を遠田郡の湧谷に移され、愈々其舊土を去らねばならんだ時に、鈴木氏は家を二つに分けて、弟の鈴木三郎右衛門は湧谷へ随つて行つて純然たる藩士となつた。久しく

遠田郡長をして居つた鈴木純之進氏は其家で、新華族の鈴木大亮氏は又それから分れた家の末である。徳川氏初期の最も重要な政策は、全國一般に所謂地侍の壓抑であつた。譜代の因みの無い新大名は、到底多數の郷士を昔のまゝに、鎗鐵砲で其名字の地に捨て、置くことが出来なかつた。武器を返すか出て奉公するか、二つに一つを取れと云ふ難題は何れの家をも悩ませた。鹿兒島領では近世郷の名を家名として居る郷士の數は多かつたが、一人として名字の地に住んでゐる者は無い。地方に由つては領主に親しみがなく、村民からは袖に縫られた爲に、刀を捨て、只の名主に成つた家もあるが、多くの舊家では兄弟のある限りは、此際に家に二つに分けて、一人は武器の誇りを保存し、他の一人は留まつて土地の利益を守つた。所謂兵農分立と云ふことが、もし有つたとすれば此時である。諸侯には度々の國替があつて、刀をさした方の家は日本國內を流轉してあるいたけれども、常に本家との聯絡を保ち、何代になつても出所を忘れることは無かつた。

實際三百年前の感情では、戦争に出られぬ農業者は、如何に大きくても、下賤の者に等

しいと見たのである。せめては我家からも一人は武家に奉公して居る者があるといふ慰安を得る爲に、此の如く遠方に在る古い分家を大事にしたのである。友人上山君の先祖の若い兄弟が、圍爐裏の側で系圖を開いて見て居たのを、母親が奪取つて火の中へ投込んだと云ふのも此時代である。覇氣の無い老人の考へでは、名譽よりも大事なのは家の存続である。家所を離れてしまへば個人の名譽心は満足しても家の記憶が滅亡する。多くの門閥家はそれが恐ろしさに、涙を吞んで飛道具を返上し、唯の百姓になり下つたのである。

鈴木君の家の事情は之とは些しく形式が違ふ。領主の壓迫は必ずしも強くなかつたらしいが、やはり又土地に離れるのを厭つて故主に分れ、城下の武家となることを断念したのである。徳川氏が佐竹氏を秋田へやり、秋田氏を二本松へ移し、さては筑後の秋月氏を日向へ封じたのも、伊達氏の涌谷政策と同様に、地侍の土地を愛惜する弱點を利用して、それと舊藩主との連絡を引離したものであらう。

三

鈴木氏では弟の三郎右が涌谷へ分家する前に、兄の九郎左衛門は既に伊達家との取合ひで、相馬郡の小豆畑と云ふ處で討死をして居つた。此の如く分家はする、故主の保護には離れる、當主の新屋形に弓を引いて討死した者の子であつたけれども、其爲に家運が聊かも傾かなかつたのは、一門の中でも最も有力な伊達成實の一家が次の領主となつて、此家を庇護したからであつた。此地は阿武隈の川口を控へた海道の咽喉で重要な地點であるが、其土地は決して豊饒では無かつた。亘理三萬石とは云ひながら、平地の半分はヤチであり、海添の新地もまだ其頃は少なかつたのである。

明治十七年に九十六歳で死んだ鼓村君の祖母が、十五で京から嫁に來た頃は、村の一本松のあたりで浪が打つて居た。今は大根島の真中で、それから海岸迄は小一里もある。す

べて阿武隈川が近年吐出した土である。

此の如き瘠土を預けられた亙理の伊達家では、夙くから財政の苦を経験せねばならぬだ。領内に富裕な舊家のあることは何か便宜が多かつた爲に、出来る限りの優遇をしたものらしく、此家が又狭い領内では唯一の長者で有つたらしい。此家では手広く耕作の利益を収めたのみならず、手代を置いて盛んに商賣をさせ、紅花の取引を一手に占めて、手船を上方に往來させるなど、宛然たる貨殖傳中の人物であつた。しかも一方には家を出れば鎗を立てさせ、三萬石の中に住みながら、此一軒のみは、毎年拜禮を仙臺の本藩に勤めて、屋形直屬の郷士とも云ふべき者で有つた。

四

此家には數十戸の分家がある外に、昔から扶持介抱を受くる眷屬が甚だ多かつた。又折

折此家の勝手口に来て食物を貰ふ者も、何れの代にも絶えたことが無かつた。百年ばかり前に、其中に一人の異人があつた。荒布のやうな着物を着て何處からとも無く出て来る老人である。其歸路を附けて見た者もあつたが、山の中ですぐに追付けなくなる。七日も十日も連日來るかと思ふと、二月も三月も姿を見せぬ時もある。常に一斗も入るかとおもふ大瓢箪を持つて來て、其中へ酒を入れて貰つて行く故に、人は之を仙人と呼んで居た。或年朝起きて見たら、玄關の柱に此大瓢箪がくゝりつけてあつて、其時以後再び來なかつたさうである。年來の謝禮に呉れて行つたのだらうと云つた。佳い色の瓢箪で口の金は黄金である。世間では之を金のふくべとも云ひ又は天狗に貰つたとも傳へて居る。今でも家の寶物として大事にはして居るが、實は此品の手に入つた頃から家道が少しづつ傾いた。其頃に磐城平の沖で持船が三ばい沈んだ。天明度の大飢饉には領分境の坂元の口と、藤葉稻葉の二箇所の渡船場と、村の兩端とに、五つの救ひ小屋を立て、倉の米を施したが、追々と世の中の變動を感じるやうになり、維新の戦争の際は、長い間、家が陣營に點ぜられて什

具が散亂した。代々の用立金は價の無い藩札を以て土藏に一杯返される。眷屬の繫累は昔の儘であるので、生計の規模を縮小することが不能であつた。

鼓村君の長兄は家の負擔を一身に引受けて、青雲の望を起さずに村長などをして父に先だつて死に、當主はまだ若い。兄弟は追々に他國に出た。

五

鈴木君の祖父は伯父の續き合ひである。通稱は十郎右衛門、號を左竹と云ふ有名な俳人であつた。若い頃からあの時代の風流の道に打込んで居た爲に、家業を煩ひとして弟の十三郎に家を譲つてしまつた。此家では二つの通り名を一代置きに用ゐてゐる。左竹は長命な人であつたが始終諸國を旅行して、生涯を通じて二十三年の間家にゐなかつた。京都との交通が昔よりも一層盛んになつて、祖母を京都の家柄から貰つたりした爲に、舊時代末

の京都趣味は滔々として此家庭へ流れ込んだ。鼓村の母は近國の生れであるが、亦京都で教育せられた人である。此里方も同じやうな趣味ある歴史をもつて居る。福島縣伊達郡梁川町に中木といふ舊家がそれである。伯父の中木篁洞と云ふ老人は詩人で、長く京畿中國を旅行した人である。今でもかの地方には却つて澤山の墨跡があると云ふ。此人の妹であつた母は、老後に歌や國文を近隣の娘たちに教へて居た。琴は祖母の方は生田流であるのに、母は却つて古い八橋流を傳へて居た。

鼓村君の琴は、六つ七つの頃に母から學んだのが始めである。此偉丈夫の傳は、彼が大に老いてから書くべしであるが、兎に角に二十四貫もあるかと思ふ大男の、風貌にも經歷にもひたと連結して居らぬのは、琴に堪能と云ふ一事である。しかしそれも三百年の家の歴史を訊ねると、漸く自然に近く聞えるのは妙では無いか。此人は慥かにローマンズの破片を、身内の處々にくつ附けて居る近代人、即ち我々の仲間であるが、家の舊榮華を語つて哀歌するやうな弱蟲では無いから、安心して此あとを聞いて貰ひたい。